

# 湘南サツカノ 実戦譜

特集

鈴木中先生の  
二十八年間

湘南サツカ一実戦譜

# 目

# 次

今は昔の物語	一回生	天野 武一
戦績報告	六回生	藤田 得利
青春とサッカー	十二回生	増田 禮二
初の全国	十五回生	大塙 正雄
関東大会連覇	十七回生	小野 昭三
(資料)	二十六回生	酒井 弘明
中学最後の試合	二十七回生	田川 修
無念の北園高戦	二十七回生	山本 明
(資料)	三十二回生	根和衛
(資料)	十八回生	純生
ペガサス戦記		部
よき兄貴		編 集 部
デ・ジャ・ブー		小泉 親次
四泊五日水戸宿泊記		山田 仁夫
白いポロシャツ		渡辺象
二十三年前の全国大会		黒沢 秀樹
遠征アレコレ		隅山 和夫

三十九回生	編 集 部	天野 武一
四十回生	小泉 親次	藤田 得利
四十五回生	山田 仁夫	増田 禮二
四十一回生	渡辺象	大塙 正雄
四十二回生	黒沢 秀樹	小野 昭三
四十六回生	隅山 和夫	酒井 弘明
四十六回生	小川 和夫	田川 修
四十六回生	研和	山本 明
二回生	二回生	根和衛
二回生	二回生	純生
二回生	二回生	部
37	33	18
32	29	17
27	25	16
20		15
		13
		12
		9
		7
		5
		2
		1

監督のプロとは

青春の指導者

わが思想の師

全員教え子のチームです

おやじ

グランド・教室・そして

神 髄

ことしの正月はよかつた

二対一

チーム雑感

地獄の天女

関東大会無情

基本で国体優勝

湘南の首領

深いしわと笑顔

理想に向かって

全国選手権トーナメント表（六十四年一月）

— 中 賛 百 人 — 首 —

O B会、そして現役

編集後記

五十四回生（監督）

藤塚久雄

(73) (71) (62) (60) (59) (58) (57) (56) (55) (53) (52) (51) (50) (49) (47) (46) (45) (43) (41) (39)

四九六回生

四十七回生

四十八回生

四十九回生

五十年生

五十二回生

五十三回生

五十四回生

五十六回生

五十七回生

五十九回生

湯浅 健二  
田中 靖  
細川 周平  
佳史 靖

梁永叔

関佳史

田中靖

細川周平

梁永叔



# 1923-34

〈大正12～昭9〉

## 今は昔の物語

### 一回生 天野武一

大正十年入学の第一回生として旧制湘南中学に学んだ私どもの仲間は、下級生達とサッカーの練習に精を出すことを楽しんでいたけれども、在校中はまだ未熟で対校試合をするまでには至っていなかったと思う。すくなくとも私自身にはその経験がなかった。

ところが、大正一四年（一九二五年）の春、旧制高校（静岡）に進学して間もないころ、高校蹴球部のマネージャーから呼び出されて、君は湘南中学の出身だからサッカーの試合を手伝えといわれ、サッカーにおける湘南中学の知名度（？）のおかげで、なにやかやと紅白試合

### 1923（大正12）

12月6日 校庭にゴールたつ  
12月8日 高等師範学校理科学生 小野徳四郎氏を招き全校生徒を対象に、実技指導が行われる。  
部長、田原先生（博物）

### 1924（大正13）

部長に後藤基胤先生（数学・高等師範主将）を招く。

### 1925（大正14）

部長、金持先生、全校チーム編成さる。  
第1回県下中学校蹴球大会（於横浜三中）12月下旬  
一回戦 県立二中 9-0 湘南中

### 1926（大正15）

●冬季リーグ戦（第1回）10月開始  
湘南 不戦勝 神工  
湘南 2-0 鎌倉  
湘南 不戦勝 関東学院  
湘南 6-0 浅野中  
湘南 1-1 三中  
湘南 2-1 師範  
湘南 0-1 二中  
順位 1位 二中 2位 湘南  
3位 師範  
●高師主催全国中等学校蹴球大会（9月下旬）初出場  
一回戦 湘南 5-0 立正中  
二回戦 湘南 1-3 成城中

や対校戦に引っぱり出されて選手となり、昭和三年（一九二八年）正月、東大グラウンドにおけるインターハイに参加して、松江と八高に連勝、山口との三回戦に敗れるまで、ともかく球を蹴って暮していた。

そのころのわが静高チームは、東京高師附属中、暁星中の出身者数名と神戸一中や府立五中その他からきた好選手に恵まれていて、湘南中学出身は私だけであった。奇しくもいまに残るわが旧制高校蹴球部史の記事によつて、このときのインターハイに関するあたりをみると『昭和二年一二月二十四日は東上して先ず湘南中学を一四対一で蹴し、幸先よいスタートを切りインターハイに臨む。』の一言が目につく。これは湘南中学に立ち寄つて練習試合をしたことなどをいうのである。ここには湘南中学側のメンバーの記載は全く欠けているが、当時、横浜高商在学中の岩淵一郎君が湘南中学チームに馳せ参じて戦つたことは、六〇余年の古いことながら、わが記憶から失せて

# 1923-34

〈大12～昭9〉

1927 (昭和2)

●高師主催全国中学大会

一回戦 湘南 2-0 藤岡中(群馬)

二回戦 湘南 0-2 高師附中

(優勝校)

●県リーグ戦(第2回)

湘南 0-4 師範

湘南 4-2 関東学院

湘南 1-3 三中

湘南 5-0 神工

湘南 0-6 二中

湘南 3-0 浅野

湘南 4-0 鎌倉

順位 1位 二中 2位 3中

3位 師範 4位 湘南

5位 鎌倉 6位 浅野

7位 関東学院 8位 神工

1928 (昭和3)

●高師主催全国中学大会

一回戦 湘南 2-1 浦和

二回戦 湘南 6-1 札幌一中

三回戦 湘南 0-5 高師附中

●県リーグ戦(2部制となる)

湘南 0-1 師範

湘南 6-1 関東学院

湘南 4-2 鎌倉

。グループ2位に止まる

おらず、湘南中学が挙げた唯一の得点も彼によるものであつたと思えてならない。私はこのとき旧制静高のフルバックを勤め、母校の後輩を相手にして多少とも申し訳ないような心境で気楽にプレー出来たことをなつかしく想い出す。これぞ、最初にして最後の母校湘南中との対校試合、今は昔の物語というわけである。

六回生 藤田得利

## 戦績報告(昭和四～六年)

本社後援、神奈川縣ア式蹴球聯盟  
主催第三回県下蹴球大會第二部准決勝  
湘南は十五日午前九時から高師  
球場で舉行  
鎌倉師範 12月11日  
湘南中學 03月11日  
工業學校 第二中學  
午後三時から湘南中學對鎌倉師範  
の決勝戦に入つたが、前半四分程  
中先づ一點を先取し廿一分師範一  
點を奪い同點で前半を終る、後半  
湘中はF.W間のシザーリバースを主  
とする連絡とE.Gの翻騰により四  
分及び廿分に得點したが師範は長  
時間で得點せず、鎌倉は長時間で  
得點を繰返すのみで好機を作り急  
速に三對一で新進湘南中學優勝  
し第一部の優勝校鎌倉高師と共に  
本社寄贈の優勝旗及び吉祥商會寄  
贈のカツバを獲得した  
湘南中學 21月11日  
鎌倉師範

## 新進湘南勝つ



昭和5年6月17日付  
東京日日新聞

昭和四年、東大入学早々の天野武一先輩は同大学の名フオワード若林氏と名ハーフ野沢氏の両氏を湘南のコートとして連れて来られた。当時東大は大学リーグでも六年間連覇中の最盛期にあつた。爾後約二年程両氏のコートを受けたのだが、これによって創部以来低迷していた湘南サッカーは一気に進展し、翌昭和五年には県下大会及びリーグ戦で初優勝し、東京高師主催全国大会で準優勝の戦績を挙げ、続く昭和六年にも県下優勝、同全国大会で準優勝し、湘南サッカーの第一次興隆期を迎えることができた。以下当時の編成及び戦績の概略を記してみ

# 1923-34

〈大12～昭9〉

1930（昭和5）

●県蹴球連盟県下中学校大会

一回戦 湘南 7-1 関東学院

準決勝 湘南 3-1 二中

決 勝 湘南 3-1 師範

●全国大会（文理大主催）

一回戦 湘南 不戦勝 水戸中

二回戦 湘南 4-0 今市中

三回戦 湘南 15-0 府立園芸

四回戦 湘南 5-0 横浜二中

準決勝 湘南 4-2 府立五中

決 勝 湘南 1-3 附中

●県リーグ戦

湘南 10-5 関東学院

湘南 3-2 三中

湘南 10-0 神工

湘南 3-1 二中

●大毎主催全国大会関東予選

二回戦 湘南 7-0 二中

準決勝 湘南 2-2 青山師範

●横浜高師主催近県中学校大会

一回戦 湘南 10-0 東亜商業

二回戦 湘南 4-1 府立園芸

決 勝 湘南 3-1 二中

1931（昭和6）

●県春季大会

湘南 5-0 師範

湘南 4-1 二中

湘南 0-1 関東学院

●東京大会

準決勝 湘南 1-0 浜松一中

決 勝 湘南 0-0 志太中

再 湘南 0-1 志太中

る。

◇昭和四年～大口檀雄（五回生）主将時代～

▽編成 ( ) 内は学年

F W 木村稔 (4) 笠原良一 (4) 小熊正雄 (2)

樋口 (2) 駒崎虎夫 (4)

H B 永楽 (2) 藤田得利 (4) 大口檀雄 (4)

F B 麻生三郎 (4) 山中敏夫 (3)

間島昌平 (4) 天野豊雄 (5)

G K 松岡三四郎 (4)

▽戦績

県内リーグ戦連勝し最後に常勝横二中と十一月下旬、

横三中グランドで決勝戦となつた。寒氣と風雨の中で対戦、前半風下の不利の位置にあつたため一点押し込まれ余りの寒さと雨風のため試合中止となり、変則にも後半のみ別の日の試合となつた。後半0-10のため結局1-1

0で負けとなり涙を飲んだ。  
夏の東京高師大会は二／三回戦で敗退した。

◇昭和五年～藤田得利（六回生）主将時代～

▽編成

F W 木村稔 (5) 笠原良一 (5) 小熊正雄 (3)

樋口 (3) 駒田虎夫 (5)

H B 麻生三郎 (5) 藤田得利 (5)

入沢栄四郎 (5) 永楽 (3)

F B 山中敏夫 (3) 間島昌平 (4)

G K 松岡三四郎 (4)

▽戦績

春、県蹴球連盟主催東京日日新聞後援県下大会決勝戦に鎌倉師範と対戦三対一で快勝、初優勝す。

夏、東京高師主催全国大会準優勝す。水海道中、今市中、横浜二中を連破、附属中と並び東京の名門校といわ

# 1923-34

〈大12～昭9〉

1932 (昭和7)

●県春季大会

一回戦	湘南	6 - 2	浅野
二回戦	湘南	3 - 1	二中
決勝	湘南	1 - 4	師範

●東京大会

一回戦	湘南	9 - 0	埼玉商
二回戦	湘南	7 - 0	神工
三回戦	湘南	5 - 0	熊谷中
四回戦	湘南	4 - 0	不動丘中
準決勝	湘南	1 - 3	附属中

●県リーグ戦

湘南	6 - 0	関東学院	
湘南	6 - 1	二中	
湘南	3 - 0	小田原	
湘南	4 - 0	師範	
決勝	湘南	5 - 0	三中

1933 (昭和8)

●県リーグ戦

湘南	9 - 0	三中	
湘南	3 - 0	小田原	
湘南	3 - 4	関東	
(グループ2位)			
三位決定戦	湘南	3 - 0	二中

1935 (昭和10)

●第二回関東中学校蹴球選手権大会

一回戦	湘南	0 - 2	府中五中
●県リーグ戦			
湘南	7 - 0	三中	
湘南	4 - 1	小田原	
湘南	1 - 0	師範	
湘南	1 - 1	関東学院	

れていた府立五中と高師グランドでほとんど五中生ばかりの応援の中に囲まれ全く白熱の準決勝戦を戦った。シーソーゲームを演じた後、二対一で快勝した。

決勝、湘南と附属中との対戦は神宮グランドで行われた。戦前には湘南の方が上と噂されていたが、附属中は一日休養を得、湘南は前日の疲労残り、且つ、F B間島、前日の戦で肉離れで全く走れぬまま出場したため、チームの力を発揮できぬ中三対一で敗れ準優勝に終った。

秋、県下リーグ戦優勝。

冬、十二月東西対抗戦のため関東大会が神宮グランドで行われ、予選を勝ち進んで決勝で青山師範と対戦一対一で引き分け抽選で代表の選に外れた。たまたまH C藤田、上級学校受験で決勝戦に欠場したため勝利を逸したと悔まれた。

◇昭和六年へ山中敏夫(七回生) 主将時代

（編集部注：藤田先輩は昭和六年のほか昭和十一年～十三年までコーチを勤められた。この間に甲子園大会出場などの好成績を記録した。）

▽戦績  
FW 松本 (4) HB 駒崎利夫 (4) GK 渡辺方平 (4)  
FB 山中敏夫 (5) 一人不詳  
H B 永楽 (4)  
この年浪人中の藤田得利はコーチを勤める。

▽編成

F W 松本 (4) HB 駒崎利夫 (4) GK 渡辺方平 (4)  
F B 山中敏夫 (5) 一人不詳

H B 永楽 (4) GK 渡辺方平 (4)  
H B 駒崎利夫 (4) GK 渡辺方平 (4)

吉田 (3) 小熊正雄 (3)

吉田 (3) 小熊正雄 (3)

# 1935-42

〈昭10～昭17〉

## 青春とサッカー

十二回生 増田禮二

一功労者大埜正雄さんがおられることがわかり、札幌に出張の折り毎月大埜さんのところによりサッカー部時代の話に花を咲かせた次第です。

私が苫小牧に石油荷役の仕事と併せて民間石油備蓄と国家石油備蓄開発の心を抱いて着任したのは五十三年暮でした。着任早々湘南二十回生の小西さん（サッカー部三菱商事）より貴兄の歓迎会を湘南会としてやりたいとの連絡があり、北海道苫小牧に湘友会があるとは驚いた次第でした。会長が湘南三回生の笠原さんで十名の方々が苫小牧の西港東港発展に尽力されているのには感銘を受けました。その中に二十二回生のサッカー部の海老原朗さんが王子製紙の幹部でおられました。また小西さんのお話で札幌には道庁の近くに十五回生の湘南サッカ

ムで湘南のグランドで蹴りまくり、なかなかレギュラになれませんでした。先輩コーチよりRWをやれとしごかれ右サイドよりゴール前に向けてキックする球が何回やつても外れてしまい、しょうがない奴だということでそれでもやっとRIの正選手になりました。当時なんといつても手ごわい相手は鎌倉師範。昭和十一年県下ア式蹴球大会では決勝戦で雌雄を決しやっと優勝を遂げました。今でも思い出すのは県下リーグ戦で小田原中戦でボールとともにゴールキーパーに体当たりし、ボールと自分がネットにひっかかる貴重な一点をあげ2-1で勝ち、香川先生よりその精神だとおほめの言葉をいただいたことです。昭和十一年、神奈川県代表として山静神大

1936 (昭和11)

部長 香川幹一

●春季県下トーナメント

一回戦 湘南 7-0 川崎中

二回戦 湘南 6-1 小田原

決勝 湘南 3-2 師範

●山神静予選

一回戦 湘南 3-0 甲府中

二回戦 湘南 2-0 志太中

三回戦 湘南 0-2 荘崎中

●県リーグ戦 優勝

湘南 4-1 関東学院

湘南 5-2 師範

湘南 1-0 二中

湘南 2-1 小田原

●神宮大会

一回戦 湘南 3-0 茨城師範

二回戦 湘南 0-6 荘崎中

1937 (昭和12)

●春季大会

一回戦 湘南 5-1 神工

二回戦 湘南 3-0 師範

決勝 湘南 4-3 三中

●山神静予選

一回戦 湘南 1-0 浜松一中

二回戦 湘南 3-1 荘崎中

三回戦 湘南 2-1 静岡中

●全国大会

一回戦 湘南 1-7 埼玉師範

# 1935-42

〈昭10～昭17〉

●神宮大会

一回戦	湘南	7 - 1	千葉師範
二回戦	湘南	0 - 12	青山師範

●県リーグ戦（優勝）

湘南	3 - 1	師範
湘南	9 - 1	川崎中
湘南	0 - 0	関東学院
湘南	0 - 0	二中

1939 (昭和14)

●全国大会山神静予選

一回戦	湘南	4 - 1	浜松
二回戦	湘南	3 - 0	埼崎
決勝	湘南	3 - 2	二中

●全国大会

湘南	5 - 0	高松商	
湘南	4 - 2	青山師	
準決勝	湘南	2 - 2	聖峰中

●神宮大会

湘南	5 - 1	聖峰中
湘南	2 - 3	明星商業

1940 (昭和15)

●関東大会（優勝）

決勝	湘南	2 - 1	明倫中
----	----	-------	-----

●全国大会

一回戦	湘南	1 - 8	普成中
-----	----	-------	-----

会に出場、埼崎中と奮戦の末破れました。このときの埼崎中は全國制覇をしております。リーグ戦中ゴールキーの園田君（十二回生）は腕を骨折してしまい、どうしても試合に出ると言つて皆の言うことを聞かず、その闘志にこたえて試合中ボールが味方のゴールに行かないようガードした事は懐かしい思い出です。

昭和十一年神奈川県で栄冠を勝ち得たときの新聞記事がありました。この記事にわれわれの最も懐かしい岩淵二郎さんが審判をやられた事が書いてあり、感憾深いものがあります。新聞記事のメンバーが湘南と師範が逆で誤記もありますので、ここに書き添えます。

△FW△太田 椎野 佐草 増田 鈴木  
 △HB△三宅 小熊 三觜  
 △FB△山口 吉田  
 △GK△園田

尚、昭和十二年卒業時香川先生を中心に撮ったサッカ

ー部の記念写真のなかで多くの方々が戦死したり戦後亡くなっています。

私も太平洋戦争中乗船した五隻の商船（陸軍徴用船）と海軍に召集になり乗船した四隻の艦艇も作戦中ことごとく撃沈大破され転勤途中の飛行機も海中に墜落したり遭難したりしました。この間一人だけ助かる事二回で九回の遭難中便乗者や乗組の軍人から一万名を越える犠牲者が出来ました。しかし湘南中で鍛えられた湘南サッカー魂といいましょうか、何くそ死んでたまるかという事で奇跡に次ぐ奇跡と幸運で助かった次第。今日の日本の繁栄を思うと戦死者とご遺族のことを考え毎日感謝と供養の日々を送っております。

二十三年ぶりという全国大会での若き後輩達のさわやかな熱戦に感動しました。ますますの発展を心から祈ります。

# 1935-42

〈昭10～昭17〉

## 初の全国

### 十五回生 大埜正雄

(大埜正雄氏からのお手紙や資料をもとに、

編集部でまとめさせていただきました。)

昭和十二年、甲子園でおこなわれた全国中学校蹴球選手権大会出場。その経緯から、まず。

予選は、山神静大会つまり山梨、神奈川、静岡の三県で行われる大会。湘南中学はこの大会で優勝し、初の甲子園出場となつた。季節は、夏。

いま野球で知られる甲子園球場のすぐ近くの球技場で戦後は接收されていた(したがって、全国制覇した第一回の国体はここではなく、西宮球場である)。

### 五年生

#### 三觜さん(才氣煥発。粘り強いCF)

椎野さん(小柄だががっしりした体で俊足。鋭い突っ込み。校内の対組陸上では当時強かった陸上競技部の選手を相手にサッカーブーで競り合うほどのスピードであつた。立教に進み、すぐ関東大学リーグに出ておられたが、予科の一年か二年のとき惜しくも亡くなられた)

#### 関水さん(堅実なフルバック)

### 四年生

田口、土屋、吉田、佐田、大牟礼、尾高の諸兄

### 三年生

田村兄、安保、内田、大埜

### 二年生

小熊弟

以上が、おそらく甲府に乗り込んだ総勢であつた。  
神奈川県では無敵であつても、山梨、静岡のチームに

その山静神予選。場所は甲府。山梨高等工業グランド。  
《メンバー》

部長 香川先生(地理の教師で、部長になつてまだ一、三年のころだつた)

監督 藤田得利さん(ライオンの異名あり。厳しく恐かつたが根はやさしかつた。湘南OBで現役時代は名CHで鳴らしていた)

主将 小熊幸雄さん(CH。温厚な人柄。インステップキックは中学生ばなれしていた。全体の姿、助走、キック、ボールの弾道、スピードなど、音まではつきり思ひ浮かぶ)

# 1935-42

〈昭10～昭17〉

勝たなければ代表として甲子園の土は踏めない。とくに、山梨の垂崎はその前年甲子園で大活躍するなど名うての強豪であった。その最大の壁、垂崎を準決勝で突破する。

余勢をかって決勝戦も撃破。

当時は今と違つて、アソシエーションフットボールというとおり、FWは固定されたW字型の布陣。安保君がウイニング、私がインナー、二人とも未熟だったから二人で一人に対した。これももちろん監督の指示であったが、二人で一途にトライアングルパスで相手を抜く。うまく

いったりいかなかつたり、いかなかつた方が多かつたが、

少しでも味方がボールをもつてゐる時間を長くするか、また相手ゴールに少しでも近付く手助けをするのが二人の役割だった。五年生、四年生ががんばってくれたので私たち、端のほうで時々取つたり取られたり時間をかけていた。

◆  
歓喜の優勝。海老茶色だったと思うが地方予選の優勝旗を安保君と私とで交互にかついで宿舎まで歩いて帰ったのをつい昨日のように思い出す。

そして、甲子園。すばらしい芝生のグランドだった。その後多くのグランドで試合をやる機会があつたが、これほど見事なグランドでボールを蹴つたことはなかつた。一回戦は勝ち、二回戦は対埼玉師範。小熊主将の絶妙のフリー・キックによる一点のみで1-5で敗れる。この年埼玉師範は圧倒的な強さで全国制覇を成し遂げた。ど

この県でも師範学校は強く関西の御影師範は全国大会でたしか何連勝もしたと記憶している。この埼玉師範優勝

同期の方のことを少し書き添える。事情で途中退部された鎌倉の鈴木さん（故人）。湘南を卒業して浜松高工に進み、主将として昭和十五年全国高専大会で優勝。浜松高工には田口さん（一年上の主将）長島君（同期）も進学しておりチームメイト。湘南の三人が中心になつての栄光と聞く。

◆  
翌年、昭和十三年は、宿敵垂崎に敗れ涙をのんだものの、翌十四年、香川、浅沼部長、島田監督、田村主将のもとで再び山静神代表となり甲子園に進んだ。順調に勝ち進み、準決勝で京都の聖峰中学に惜しくも抽選負けで三位。同じ年の秋おこなわれた第一回明治神宮体育大会（のちの国体）では、その聖峰中学を大差で破り雪辱を果たした。しかしその大会も準決勝で大阪の明星商業に延長戦で1点先取しながら逆転負けを喫する。悲願の全国制覇は、戦後（昭和二十一年）第一回の国民体育大会で香川主将率いるチームの快挙まで待つことになる。（編集部注——そのときの監督がこの大塚正雄氏。氏は、昭和二十九年マニラの第二回アジア大会まで日本代表選手として第一線で活躍されたトッププレーヤー）

◆  
《メッセージ》

大変お世話になつた諸先生、諸先輩、同僚、後輩の皆様にも亡くなられた方が多く心からご冥福をお祈り申し

# 1935-42

〈昭10～昭17〉



上げます。あとに残る湘南サッカーゆかりの皆様が、ますますお元気で活躍されるよう念願するものです。くわしい情勢はわからずに軽々しく申し上げられませんが、勝つことは誠に容易ならざることのように思います。と、いって引き下がっているわけに参りません。年々チームが変わり強いときも弱いときもあるうかと思いますが、湘南サッカー部の伝統のもとに皆で力をあわせて活路を見いだしていただきたいと思います。湘南の五年間を振り返ってみると私自身もっと集中してやれたのではないかなという気がいたします。現役諸君、どうか部長先生、監督のご指導のもとに悔いのない三年間を送っていただきたいと思います。頑張ってください。「湘南勝つ」の快哉を叫ぶ日を心待ちにしています。

## 関東大会連覇

十七回生 小野 晴

私の在校していた昭和十二年から昭和十七年は、まさに湘南サッカーの黄金時代といわれ、その時々の名試合は、すでに「湘南サッカー半世紀を経て」に諸兄がそれぞれ述べられているので私はここでは別掲の新聞の記事について補足をすることにしましょう。いずれも朝日新聞社後援、関東蹴球協会主催、関東府県対抗中等学校蹴球大会の第八、第九回（昭和十五年、十六年）の朝日新聞の記事です。

ごらんの様に第八回大会では各代表チームの紹介、大会予想、試合経過、大会総評と写真と共に大変充実したものでした。又同時に朝日スポーツという週刊紙もあって、試合写真が沢山あつた様な記憶があります。

ところで、この写真も新聞の写真とともに相手の明倫中学の攻撃のもので、優勝した我々のゴールゲットの場面ではありません。不思議に思われるだろうがこれは、予想では明倫優勝ということでカメラマンが全員（といつても当時は三、四人程度）湘南のゴールの後に構えていたためなのです。我々はそれを見て、彼等と明倫優勝と予想した連中の鼻を明かしてやろうと無言のうちにファイトを燃やしたものでした。得点は二一一でしたが、戦った我々はまさに圧勝という気がしました。新聞記事

# 1935-42

〈昭10～昭17〉

には書かれていないが、この時のバックスとキーパーは最強で、その完璧な守りとFWへの好フィードがあったればこそ初優勝できたのだと今でも信じています。

ところで、プロは別として最近のサッカー記事に得点者、アシスト等を特別に記載することに疑問を感じているのは私だけなのでしょうか？ 目立ちたがりの風潮と一であって、お互いの信頼と忠実なプレーの積重ねに外ならないと思っているのですが……。

もうひとつ、この八回大会の新聞記事に不満なところがあります。それは、湘南チームについて奔放な動きがなく、迫力に欠けると評している点が随所に見られることです。構成メンバーの体力、脚力によって理にかなった戦法を取るのは当然のことであり、それを生かすのは持久力とファイトによる以外ではなく、先輩がはぐくんできたもの、監督、コーチの適確な指導のもたらした優勝に外ならないと確信しているからです。

申し遅れましたが、この第八回の記事は十八回生の高橋謙氏（旧姓藤井）から昭和六十二年の十一月十五日のOB会の帰りの車中で、スクランブルしていると聞き、コピーをいただいたものです。

さて、次の第九回大会に移りましょう。この時、私はキャプテンでした。優勝旗を返還する時、これを再び手にすることができるか、一瞬不安が過ぎりました。といふのは、この時の優勝候補は東京の青山師範で、この年すでに二回（一回は秋の神宮大会）負けていたからです。新聞記事は前年の第八回に比べてなんと僅かなものでし

• 昭和15年12月26日 •  
第八回関東府県対抗中等蹴球大会決勝戦

対明倫中学（千葉県代表）

明倫中左コーナーキックを湘南中I-R小野勝（弟）  
ヘッディングでクリヤーしたところ



遠くにいる  
O.L. 小野 嘉

ジャンプしてヘッディング  
でクリヤーする  
I-R 小野 勝

斜にかまえる  
R.H. 菅原留意

低くかまえる  
C.H. 小熊正雄

がつちりそなえる  
R.B. 太田重郎  
L.B. 戸沢 澄

# 1935-42

〔昭10～昭17〕

よう。時は昭和十六年十二月二十八日からの大会で、あの太平洋戦争勃発から三週間後のことです。日本中、いや世界中が大変な時代に突入した時で、中学のサッカーどころではなかつたので試合が行われたことが不思議なくらいです。

大会の一、二回戦は練習試合の様で楽勝、神宮外苑の青年会館で最後の宿泊をし、翌日の準決勝、決勝に備えました。翌三十日、いよいよ決戦の日で、今日はダブルヘッターです。準決勝の相手は豊島師範で第一試合でした。これは四一〇で楽勝した様に思います。（というのとは、午後の決勝戦の記憶があまりにも強烈で、前の試合のことが全く思い出せないです）

決勝戦は予想通り宿敵青山師範となりました。御承知の様に当時の師範学校生は中学生より二年年長であったので、この年代の二年は体力で大きなハンディキャップです。しかし、我々チームは新聞記事の様に全く互角に戦いました。延長すること三回、各二十分钟で一時間、トータルまさに二時間の死闘の上、優勝を勝ち取ったのです。決勝の一点は、タイムアップ直前一分ぐらい、私の左足からの夢中のセントアーリングのボールを、ORの海老原謙君（兄）がダイビングヘッドし、相手バックスの股間を抜けてゴールしたものでした。私はその光景を敵のバックスともつれ、グランドに倒れた状態で、しっかりと眼に入れたのを、現在のビデオで再生する様に今でも鮮かに思い出されます。

優勝旗を再び我が家にし、重責を果した喜びに思わず涙が溢れ、列に戻って廻れ右をした時、優勝旗が顔に巻きこみ、おもむろに頭をかぶせられ、顎を打たれました。

さかし、この記憶は諸兄の胸中に残って、この新聞記事と共に次の世代に語り継がれて行くことと思います。

この関東府県対抗中等学校蹴球大会は、戦争のために最後になりました。その優勝旗は永遠に母校に残るはずでしたが、昭和三十三年二月の火災で校舎もろとも焼失してしまいました。

六月二十二日

和洋中五十年代二月十二日

三回戦も無事勝利して決勝進出を確実にしました。

しかし、この記憶は諸兄の胸中に残って、この新聞記事と共に次の世代に語り継がれて行くことと思います。

こと

## 湘南中制覇

関東府県対抗中等学校蹴球大会

## 六年振りに實を結ぶ

湘南中制覇

六年

六年

**1943-60**

〈昭18～昭35〉

昭和23年10月3日

神奈小版

**座間町独立祝い** 新生  
座間町会は二八日町條例や予算  
案などを審議した。本お明二日の  
独立記念祝典には佐藤本國務相、内

**湘南高**（サッカー）準決勝へ進む

郷土選手、各種目に活躍

## 國民体育大会

（同上）  
南大震会、日本は競技場で熱戦が展開されたが、本戦は攻撃手の戦闘は次の通り。  
新制高松サッカー第一回戦で湘南高松は開幕後立て九州代表の鹿児島高松と対戦。鹿児島の名門がす南方の強豪を倒し、湘南勝て仙台高と対戦することとなつた。サンカーリー界の大先駆竹脇氏のコートによるばかりに決勝に出場は開港いなく、選手たちは自衛団である。



昭和23年、第3回国体高校サッカー（於福岡平和台）  
朝日新聞コピー 26回生 酒井 佐弘（提供）  
1回戦 2-0 鹿児島高校五部  
準決勝 6-1 仙台一高  
決勝 0-1 広大附属

# 1943-60

〈昭18～昭35〉

## 中学最後の試合

二十七回生 田川 明

僅かに藤沢一中（裏中）に一勝しただけで、鎌倉学園中等部に引き分けと惨憺たる戦績に終わり、栄光の湘中蹴球部最後の一員として今も諸先輩に恥ずかしい限りと考えている次第です。

今は昔、昭和二十三年の秋、国体の決勝戦で青年部（高校チームをこう言った）が広島高師附属校に惜敗、二度目の全国制覇を逃した日に、我々少年部（神奈川県立湘南高等学校、併設中学校サッカー部をこう言った）はまだ焼跡の残る（昭和二十年五月二十七日横浜大空襲）三春台は関東学院のグラウンドで宿敵関東学院中学部と秋の大会一回戦を行い0-3で完敗、湘南中サッカー部最後の公式戦を終えました。因に春の大会一回戦は、湘南のグランドで同チームに2-1で惜敗しています。

青年部が全国第二位のこの年、我々は公式戦二連敗、

最後の公式戦では、鎌倉在住の有力二選手が「どうせ勝てない相手だから」と、試合をボイコットしたために、九名で試合をする羽目になりました。小生そのころ鎌倉にいたため、欠場の二選手ともども今はなき浪人山（図書館の場所です）に呼び出され、国体帰りのこわい応援団長にこっぴどく叱られたものです。二十七期の我々は旧制中学入学の最後ですから高二まで下級生がない、まったく非劇の運動部員でした。

少年部の成績が、余りひどかったためか、高校時代の三年間は岩淵さんから徹底的にしごかれ、二十六年春全國大会（大毎大会）準優勝の小田原高校に2-1で快勝、三年ぶりに県下一位となり大いに面目を施したものです。

1946（昭和21）

●復興第1回県下蹴球大会（優勝）

●国体地区予選

湘南 2-0 浦和中

湘南 6-0 荏崎中

湘南 1-0 仙台一中

●第1回国体（優勝）

決勝 湘南 3-2 神戸一中

1948（昭和23）

●国体地区予選

湘南 5-1 東京付属中

●第3回国体（準優勝）

決勝 湘南 0-1 広島高師付属中

1949（昭和24）

●国体県予選で小田原高に敗退

●県高校リーグ戦（一部）

湘南 不戦勝 鎌倉師範

湘南 2-0 横浜三高

湘南 5-1 小田原高

湘南 2-0 横浜一高

●第1回関東高校蹴球選手権大会

（宇都宮）

一回戦 湘南 6-1 大田原高

二回戦 湘南 1-3 春日部高

●大毎大会県予選

準決勝 湘南 2-1 鎌倉高

決勝 湘南 2-3 小田原高

# 1943-60

〈昭18～昭35〉

1950 (昭和25)

●県下春季選手権大会

一回戦 湘南 2-4 希望ヶ丘高  
(横浜一高)

●国体県予選

一回戦 湘南 6-0 川崎高  
二回戦 湘南 6-0 慶応高  
準決勝 湘南 1-2 小田原高  
三位決定戦 湘南 4-0 Y校

●県下春季リーグ戦 (一部)

湘南 2-0 鎌倉高  
湘南 2-0 横浜三高  
湘南 5-2 希望ヶ丘高  
湘南 0-1 小田原高  
●第2回全国関東高校選手権大会  
(大宮)  
一回戦 湘南 1-5 宇都宮高

1951 (昭和26)

●県春季選手権大会

一回戦 湘南 4-0 鎌倉学園

二回戦 湘南 1-4 小田原高

●国体県予選

一回戦 湘南 1-0 Y校  
二回戦 湘南 3-0 厚木高  
準決勝 湘南 4-0 神奈川工  
決勝 湘南 2-1 小田原高

●国体南関東予選

準決勝 湘南 1-2 北園高

●県下リーグ戦 (一部)

湘南 3-0 Y校

湘南 0-3 小田原高

湘南 0-0 希望ヶ丘高

湘南 0-1 鎌倉学園

△湘中少年部二十三年度戦績▽

1-2 関東学院 / 0-1-3 関東学院 (公式戦)

0-1-1 鎌倉学園 / 1-1-0 藤沢一中

湘中少年部メンバ-1

GK 枝 (星沢)

FB 田川 / 辛島

HB 安部川 / 柳川 / 加藤 (道八)

FB 海老原 (俊) / 栗原 / 河原井 / 木原 / 橫溝 /

星沢 / 高階 / 大林

△高校二十七期記録 十三勝七敗二分▽

4-1-0 慶応 / 1-1-0 鎌高 / 2-1-3 厚木 / 4-1-0 Y校

0-1-1 小田原 / 2-1-0 三高 / 0-1-1 附属高

4-1-0 鎌高 / 1-1-2 セントジョセフ (初の国際試合)

1-1-4 小田原 / 2-1-2 希望が丘 / 4-1-0 都立西高

1-1-0 Y高 / 3-1-0 厚木 / 4-1-0 神奈川工業 /

2-1-1 小田原 (県優勝)

1-1-2 北園 (南関東大会)

3-1-0 Y校 / 0-1-3 小田原 / 0-1-0 希望が丘 / 1-1-0

鎌高 (リーグ戦)

2-1-0 千葉 / 0-1-1 真岡 (関東大会)

4-1-1 Y校 / 2-1-3 翠嵐

県大会優勝メンバ-1

GK 枝

FB 柳川 土田

HB 小瀬村 山本

FW 加藤 武田 水島 島田 出口

SB 近藤 朝比奈

栗原克夫、一回戦前半で右手骨折のため欠場

# 1943-60

〈昭18～昭35〉

## ●大毎全国大会県予選

一回戦 湘南 1 - 0 鎌倉学園

二回戦 湘南 4 - 1 Y校

準決勝 湘南 2 - 3 翠嵐高

## ●第3回全国高校蹴球選手権大会

(湘南高G)

一回戦 湘南 2 - 0 千葉一高

二回戦 湘南 0 - 1 真岡高

1954 (昭和29)

## ●国体県予選

一回戦 湘南 0 - 2 小田原高

湘南 1 - 2 小田原高

(再試合)

## ●第3回東日本大会

一回戦 湘南 6 - 2 本荘高

二回戦 湘南 2 - 1 館林高

三回戦 湘南 0 - 4 教大附

1955 (昭和30)

## ●県下新人戦

一回戦 湘南 0 - 4 小田原高

## ●国体県予選

一回戦 湘南 5 - 0 栄光学園

二回戦 湘南 4 - 0 Y校

三回戦 湘南 4 - 0 法政二高

準決勝 湘南 抽選勝 茅ヶ崎高

決勝 湘南 0 - 1 翠嵐

1960 (昭和35)

## ●関東大会 (準優勝)

決勝 湘南 1 - 2 市立浦和

# 無念の北園高戦

## 二十七回生 山本修

小生が入部したのは昭和二十四年夏でしたが、秋の国体予選の記録は残念ながらメモが見当たりません。小田原高との対戦で激戦の末惜敗した試合はCH近藤（当時二年）の獅子奮迅の活躍が強く印象づけられました。また試合後岩淵監督が直々に、三年生は引退し二年生以下の新メンバーで来年の国体めざしてスタートするとの指示をされたのをおぼえています。

昭和二十六年、小生が三年の時には、国体予選一回戦で手首骨折したキャプテン栗原（C.F.）を欠きながら勝ち進み（キャプテン代行は小生が務めました）、準決勝

で翠嵐高に抽選勝ちした小田原高を決勝で破り三年ぶりに県下優勝をとげました。しかし南関東地区予選では、北園高と対戦。2-1で敗れたその試合は無念で、いまだに忘れられません。キャプテン栗原も出場しましたが、失点は2点ともフリー キックからで、特に1点目はダイレクトにGKの頭上を破られる強烈なロングシュートでした。あとで聞いたところでは、キッカーはのち慶應大そして古河電工で活躍した小川選手のことです。フリー キックの原因となつた柳川のバックチャージについて、応援に来てくれていた佐々木・前田らのO.B連中がレフエリーの判定がおかしいと試合後いきまいていたのをおぼえています。レフエリーは風体から考えて、協会の見目氏だったと思ひます。

2点目は同じような位置でのフリー キック。今度は地をはうような強いキックで、小生がこれをミス キックし右へ流れでスピンドルのかかった変則バウンドするところを

# 1943-60

〈昭18～昭35〉

LWにプッシュされてしましました。もう二十年前のこ  
とですが、痛恨のミスキックはいまだによくおぼえています。

## △昭和二十四年戦績▽

国体県予選で小田原高に敗退し、香川、小川、斎藤の  
三年生は引退し近藤新主将のもとにスタートした新メ  
ンバーでの記録のみ。

### 練習試合

3-1 鎌高 / 1-0 春日部高 / 4-1 慶應高

県高校リーグ戦（1部）

不戦勝 鎌倉師範 / 2-1 横浜三高

5-1 小田原高 / 2-0 横浜一高

第一回関東高校選手権大会（於・宇都宮）

1回戦 6-1 大田原高 / 2回戦 1-1 春日部高

大毎大会予選  
準決勝 2-1 鎌高（近藤、左足捻挫で後半退場）

決勝 2-1 小田原高

## △昭和二十五年戦績▽

練習試合 1-2 鎌高

鎌倉高校創立記念招待大会 2-1 厚木高

県下春季選手権大会 1回戦 2-4 希望が丘高

練習試合（伝統のYシャツ型ユニフォームを廃し、こ  
の試合から新ユニフォームに） 5-1 鎌高

教育大附属定期戦（湘南G） 2-1 附属高

夏季合宿 練習試合 9-1 藤沢高

国体県予選

1回戦 6-1-0 川崎高 / 2回戦 6-1-0 慶應高  
準決勝 1-2 小田原高 / 3位決定戦 4-1-0 Y高  
県下秋季リーグ戦（1部）三勝一敗 2位

5-1-2 希望が丘高 / 0-1-1 小田原高

練習試合 2-1-1 鎌高

第二回関東高校選手権大会（於・大宮）

1回戦 1-1-5 宇都宮高

招待試合（第二十二回東西学生王座決定戦・早稲田1  
関学戦の前座） 0-1-2 小田原高

## △資料△

三十二回生 関根 和衡（提供）  
国体神奈川県予選決勝（昭30年）

湘南 0-1-1 翠嵐 O.F.のオウンゴールで  
破れる、残念！

静岡遠征（昭30・12月25・26日）

湘南 4-1-0 沼津東

" 0-1-1 静岡

前半善戦。後半相手は  
正メンバーに交代。

国体神奈川県予選（昭31年）

湘南 0-1-1 横浜商業 相手C.F.、C.H.強く  
惜敗。

# 1943-60

（昭18～昭35）

昭和54年3月16日付 神奈川新聞

18回生 早川 純生 提供

## 神奈川スポーツ史 昭和後編

☆ 48 ☆

「一眼地を抜いた実力で、県代  
表から関東予選進出。東京高師  
付属、真岡、浦和をなき倒し、関  
東代表に。東日本代表決定戦は  
仙台中に一〇〇で快勝だ。  
「食糧の買い出しやヤニ配りで  
超満員の後列車」（香川）に乗  
り、西宮へ西下、西の代表神戸  
で相撲する県朝体育連盟担当  
に手投げすることから始まる。  
時のことごとく試合はしないが相  
手がない。で、県協会を通じて競  
争を申し込んだ。「確  
かにやられたものか、全く彼ら  
がチーム集めである。委員会  
の奔走でよほ参じたのは、実業  
団中学生が三十人チーム。しか  
し翌年は三十二人に膨れ、こちら  
は徐々に活動が始めた。

ボール探しに泣く

か、金元などいう人、その代  
わりに連携車から幾つもボール  
を仕入れてくれた。外製の二  
コ一ボールですよ。お陰でだい  
むさくボール探し方が道  
筋で、金元には、「金元は金元」と評された。

相手をしたのは主にNKG。  
日本鋼管、関東学院、県立高  
等校も校技サッカーを絶やす  
かった時代でも、まだあ  
れはない。それさえ確保できな  
いチムが多かった。配給のボ  
ールも、ズメの涙ほど。

（昭18）  
海江田は学校も入ってい  
た。（昭19）  
當時の横浜市は沈没マード。  
代を參じた。

### サッカー①

## 湘南中が国体優勝

### 食糧事情が実力に反映

すでに進行している。  
委員会、戦前も成し得なかっ  
た。

戦後初の快挙は、二十一午年十  
月、第一回国体での湘南中の  
金正雄（元全日本）。

金正雄である。  
松原（現）原田佐々木などが  
いた。

いた。  
翌年、第三回福岡国体も國  
立小田原とてばまるで違う。  
といつも、食糧事情が横浜と  
湘南、小田原とてばまるで違う。  
てばまるで、「小田原中など、  
（試合）よく、あいつらが  
ボルと二時間父でゴーリー<sup>1</sup>  
ストを倒すた」（監督岩瀬順一  
氏）。

（昭20）選手の懇意要（元県協  
会理事長）の述懐。  
特訓で小田原台頭  
（昭21）選手の懇意要（元県協  
会理事長）の述懐。  
（昭22）選手の懇意要（元県協  
会理事長）の述懐。

（文中略）



第一回国体で伝統の力を発揮、初の全国制覇を遂げた湘南ナッシュ。前列右から二人目が香川主将、左隣が小林（同姓）、左端奥田の各氏。=森田氏提供

（昭23）

（昭24）

（昭25）

（昭26）

（昭27）

（昭28）

（昭29）

（昭30）

（昭31）

（昭32）

（昭33）

（昭34）

（昭35）

# 1943-60

〈昭18～昭35〉

## ペガサス戦記

### 編集部

第三回を迎えてわが湘南は一部Aクラスチームとして自他ともに定着してきた。高齢者サッカーの紳士的プラス友好的の本分を忘れた考え方や行為を発揮したチームが課題となる中につながり、終始にこやかに全試合全員出場を楽しみながら一部三位を得た湘南の実力と模範的態度は称賛的となり、「楽しむサッカーイベント」実現にあたっての中心的役割を果たすことになる。

昭和五十三年十月末、横浜は菊名のある赤提灯。五人の男が酒を飲んでいた。誰かが「こうやって酒で集まるのもいいが、からだのことも考えて今度はサッカーをやるために集まらないか」と口走り、話が一気に盛り上がる。そして、一週間後に岩淵先生のお宅へ伺つて主旨を話す。先生、待つてましたとばかり大賛成。とんとん拍子にまとまって、チーム誕生。

「湘南サッカー半世紀を経て」で紹介されたように、湘南ペガサスは、こうして発足したのである。三十回生から三十六回生あたりのOBを中心としたこのチームはメンバーも着実に増え、目覚ましい活動を続けていく。

四十雀リーグが現れるまでは、その都度グランドと相手探しに苦労してきたが、その中から小田原高・栄光学園OBとの試合および、かつてしのぎを削った高校OBらによるONE DAYトーナメントが現高校の協力のもとに、ほぼ定期戦として実現されるようになり、桜や豚汁つきの集いを毎年楽しめるようになった。

### 3 神奈川県会議長杯トーナメント

四十雀各チームが友好をはかりながら、平等の試合数。内容を楽しむ二部制リーグに加えて、実力を確かめるトーナメントが冬季に開かれることになった。

### 4 楽しむサッカー大会の実現

以下、六十二年・六十三年の活動・戦績をOB会報（三十二回生牛尾慶邦氏、二十七回生田川明氏の原稿）をもとに掲載します。

六十二年・六十三年の活動・戦績をOB会報（三十二回生牛尾慶邦氏、二十七回生田川明氏の原稿）をもとに掲載します。

# 1943-60

〈昭18～昭35〉

ント決勝の日にイベント開始が実現することとなつた。これで約三分の一人たちが寂しさから立ち直り、若々しい笑いの中に大会が一層盛んになつてきた。

## ▲六十三年▼

六十二年末から六十三年三月にかけて、四十雀大会出場の一、二部計十八チームがオープンのトーナメントで、第一回の神奈川県会議長杯をかけて戦う。

一回戦 不戦勝 横浜シニア

準々決勝 2-1-0 神奈川四十雀

準決勝 3-1-0 鎌倉四十雀

決勝 4-1-2 横浜OB

で栄冠を獲得。結成十周年の年に花を添える。

☆「四十才、若いなあ！」といわれるペガサス。OB諸兄も適齢期に達したら、ぜひご参加を。

### 事務局

〒248 鎌倉市稻村が崎二一三一十三

大内健嗣 ☎ 0468-12215782

〒255 中郡大磯町東町一一七一十四

井上 孝 ☎ 0463-16114234

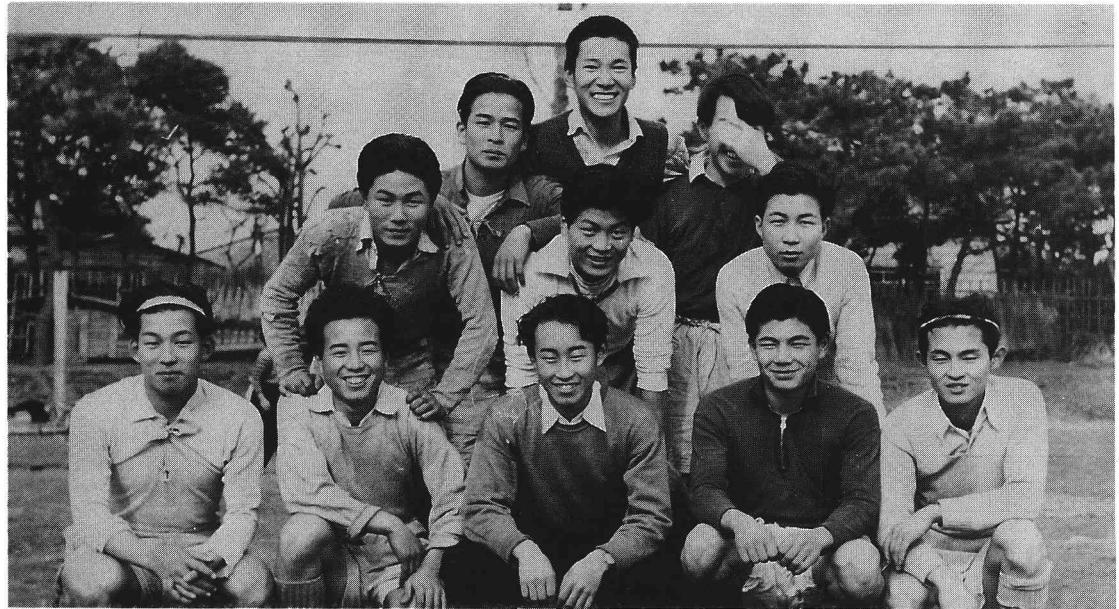




昭和11年。県大会優勝



昭和11年、横浜第2中学校グランド 豪雨の一戦



昭和 24 年メンバー





昭和 40 年、県大会優勝。賞状授与は、香川先生。



昭和 47 年、苦杯の時代だった。



昭和 52 年 O B 会。



昭和 52 年、岩淵先生退官記念・洗心亭。

# 全国大会出場祝賀会・壮行会

(昭和 63 年 12 月)









鈴木中先生の  
二十八年間

# 中贊譜

(鈴木中先生の湘南高校二十八年間を編集部でまとめたものです)

▼昭和三十六年、湘南高校赴任。サッカー部監督。二十五歳の、瘦身(!)の、青年教師が湘南のグランドに現われた。ぎょろっとした眼がとくに印象的だったと、当時の選手たちは言う。俳優の二橋達也によく似ていた。女子生徒たちがキャアキャア言つた、ということはなかつた。この年、第四十回全国選手権に出場。

▼それから平成元年にいたるまでの二十八年間を、三つに分けてみる。はじめの十年間、次の十年間、そしてその次の八年間。

世の中もずいぶんまぐるしく移ったが、当然、湘南サッカーと中さんの歴史にもそれぞれの表情がある。

▼はじめの十年間。そのころのメモや記録のようなものが手元に残っていませんか、とお聞きしたのだが、「それが皆目ない」。考えてみれば、バリバリの現役で体力的にもサッカー観においても情熱一辺倒のころだった。

日々の勝った負けたを書き留めるなど、まどろっこしかったというところだろう。東京教育大のインカレ制覇時の主将、国体教員の部での二年連続優勝などの過去をまったく知らない選手たち（「本人が一度も口にしたことがないかったから）も、そういう実績より何より、ボールと脚の関係の迫力に圧倒されたという。

▼青年監督に率いられたこのころの湘南は、県内で常勝の時期。新人戦優勝、国体県代表、そして四十年には戸で行われた関東大会で優勝など、好成績の連続だった。しかし、ガムシャラな、という勝利至上主義ではなかつた。これは、二十八年間どの年代の選手たちも同意見だが、よくいる根性監督とはおよそ違っていた。サッカー

の質ということに、とことんこだわるところがあつた。

「あのころの中さんは、WMだ、424だ、3バックだ、4バックだ、ボルトシステムだ、スイーパーだ、と何か新しい可能性はないか、常識の枠を超えるヒントはないかと、外国の文献など手当たり次第に開いていた」ということを人から聞いたことがある。要するに、サッカー観だろう。並の監督とそこに差があつた。

▼岩淵一郎大先輩に、なみなみならぬ敬意を抱きつつも、「おれのサッカーは、おれのサッカーは」と意氣がつていた時代だと、ご本人が言う。なにはともあれ、新婚の青年監督は、毎日毎日まつくりになるまでグランドを離れなかつた。

▼昭和四十一年八月、いたましい不幸。はじめてのお嬢ちゃんが急死。生後八ヶ月だった。その日は、十和田湖で第一回全国総体の真っ最中。おそらく暑い日だったという。昭和四十四年、第十一回アジアユースサッカーフィーバー日本代表主務としてバンコックへ。

▼次の十年間、四十六年から五十五年は、教師鈴木中の壮年期ということになる。サッカー部の監督をつづけながら、クラス担任もこなした時代だった。

例の百校計画の前で、進学の名門湘南のイメージは、現

在よりもさらに強烈だった。この時期の記録は、前の大年にくらべるとはるかに手元に残っているそうだ。「ただ、それが、あんまりサッカーについてじゃないんだな。クラス日誌、クラス写真、成績一覧表、入試状況といつたぐあいに、要するにホームルーム関係のものがやけに多い」だからといって、サッカーがおろそかになつた、情熱がさめたのだと誰も思っていない。それは、この時期に教わった選手たちの別掲の文章に明らかである。

つまり、教師としての充実期だったのだ。

▼それが原因かどうか、その時期の選手たちの結婚式への出席がきわめて多い。「漢の高祖も秀吉も天下取らなきやただの人、まして凡夫の俺じやものボール蹴らなきやただの人」あのサッカー小唄が何度も何度も披露宴会場で聞かれたわけである。ちなみに仲人を引き受けたのは現在まで七人。今後も、いつでもどうぞ、だそうである。

▼四十五年の岩手国体、四十六年の和歌山、四十七年の鹿児島とつづいて、少年の部監督。四十六年からは、サッカー協会の技術委員長。これは、その後十八年間務められる。

▼五十二年、茅ヶ崎に転居。そこはOB呼ぶところの、料亭茅ヶ崎あるいは居酒屋鈴木。まったくほんとに次か

ら次と教え子が来た。来れば酒だ。はじめはバカッ話だけれど、そのうちサッカー論となり、白熱し、最後はバカッ話で終わる。そういう庵だった。

▼中さん語録というのを挙げるとかなりなものになる。

それでもまとめてもいいが、やめた。「ばか言え」と、一

喝されるのは目に見えている。先生は照れるとすぐ怒る。

ただ、そういった語録の切れ端を集めた総論としてこんなことが言えないか。中さんはサッカーを通じて人生を

とか何をとかを教えたりはしなかった。サッカーでサッ

カーを考える考え方を教えた。その考え方を、別の場面

で生かすかどうかは勝手にしたまえ、というものだった。

▼そして、次の八年間。昭和五十六年から、久々の全国大会出場を果たした平成元年まで。

この時期は、高体連やサッカー協会との関わりが急増する。五十六年、地元で開催された全国総体の事務局長。

五十八年、スペシャルオリンピック世界大会に日本代表監督としてアメリカへ。六十年、日本高校代表チームヨーロッパ遠征に副団長としてドイツへ。そういう視野で日本のサッカー、そして湘南のサッカー眺めた時期。だから、サッカー観、教育観のメモもかなり積もった。

「いずれ、まとめて書く」そうだ。ベンネームもあって、

「蹴球玄人」あるいは「毎週苦勞人」。やっぱり照れて  
いる。

▼昭和五十五年、不世出の蹴球哲人、岩淵一郎先生が逝  
去。中さんにとって、ガンさんは何だったですか。

「人生で一人か二人、会えるか会えないかという人。あ  
の知性、あの精神、あのサッカー狂い」中さんは毎年、  
大庭靈園の墓参りを欠かさない。これは、ご本人は一度  
も言ったことがないが、確かな筋から情報である。

▼遠征に行けば、全国に名を轟かせる名門校が湘南と試  
合をやりたがる。たとえ、さほど強いチームでなかつた  
年でも、必ず。それはなぜか。いくつか答えは考えられ  
るが、つまり、湘南サッカーとはそういうものなのだろ  
う、と中さんが言われたことがあった。

▼平成元年、いや正確に言えばあれはまだ昭和六十四年  
の正月だった。二十三年ぶりの全国大会。三ツ沢グラン  
ドに校旗が大きく揺れる。三回戦で盛岡商高に敗退。そ  
の翌々日、元号がかわったのだ。

そして、その年の春。鈴木中先生は、教頭として神奈川  
県立荏田高校にうつられた。

# 1961-70

〈昭36～昭45〉

1961（昭和36）

●国体県予選（優勝）

決 勝 湘南 1 - 0 慶應高

●国体

一回戦 湘南 1 - 2 鶴岡工

●全国選手権県予選（優勝）

決 勝 湘南 1 - 0 小田原高

●全国選手権

一回戦 湘南 0 - 5 修道高

1962（昭和37）

●関東大会予選

決 勝 湘南 3 - 1 小田原高

●関東大会

一回戦 湘南 1 - 2 浦和

●国体県予選（優勝）

決 勝 湘南 3 - 0 鎌学

●国体

一回戦 湘南 1 - 2 徳島商

●全国選手権県予選

準々決勝 湘南 0 - 2 慶應

1963（昭和38）

●関東大会県予選

決勝リーグ 第4位

●国体県予選

準決勝 鎌学に敗れる

●全国選手権県予選

準々決勝 湘南 0 - 3 鎌学

よ  
き  
兄  
貴

三十九回生 小 泉 親 昂

昭和三六年、湘南に入学すると同時に、サッカー部に入りました。部長は宮原先生でした。しかし一ヶ月もたないうちに宮原先生がオリンピック準備室に異動されることになり、後任に京都から若くていきのいい先生がくるということを聞かされました。

確か五月の連休明けだったと記憶していますが、鈴木先生が着任されグランドにててこられました。ちょうどその日、私の母が入院することになっており先生と初めて言葉をかわしたのが、今日の練習を休ませてほしいということでした。

その夏の合宿で徹底的に鍛えられ国体（その当時は単独校出場）予選にのぞみあつといふ間に優勝し、関東予選も通過して一六年ぶりの本大会（秋田）出場となりました。夏の合宿で右フルバックとしてレギュラーの位置を与えられたことが、いまもってボールを蹴り続けているにつながっています。

以来二八年間のお付き合いですが、高校時代はさておき、卒業してからはよき兄貴として親しみを込めて中さんといいなれておりますのでそういうわせていただきます。中さんが着任した時点では、前年関東大会で準優勝したにもかかわらず、県予選ではやばやと敗退していました。部員も三年生が三人、二年生が八人、あとはわれわれ一年生というものでしたが、中さんがとった指導法は、自らが実際にプレーをして見せ、その当時オリンピックのために日本協会が呼んだクラマー氏の理論をとうした指導でした。

# 1961-70

〈昭36～昭45〉

1964（昭和39）

●県下新人戦

準々決勝 湘南 1-1 鎌学

●関東大会県予選（代表）

決勝 湘南 6-0 藤沢

●全国総体県予選（優勝）

決勝 湘南 3-2 藤沢

●国体県予選（第2位）

決勝 湘南 0-2 鎌学

●全国選手権

準優勝 湘南 1-4 鎌学

1965（昭和40）

●県下新人戦（優勝）

決勝 湘南 7-0 小田原

●関東大会県予選 準優勝（代表）

●関東大会（優勝）

決勝 湘南 1-0 帝京

●国体県予選

準決勝 湘南 0-2 慶應

●全国選手権県予選（優勝）

決勝 湘南 2-1 茅ヶ崎

●全国選手権

一回戦 湘南 0-0 甲賀

1966（昭和41）

●県下新人戦

準々決勝 湘南 1-1 相工大附

●関東大会県予選（代表）

湘南 4-0 相工大附

●関東大会

一回戦

●全国総体県予選

準々決勝 湘南 0-0 相工大附

その年は冬の選手権にも戦後初の出場をしましたが、修道（全日本の監督をした森氏がいました）に五一〇で敗れました。私が二年生の時は関東大会、国体（岡山）と出場し県内では向かうところ敵なしの状況でした。その夏、われわれ二年生は中さんのアパート（学校のすぐ側にあります）によばれ、冷やし中華をご馳走になりながら新キヤプテンをどうするかを協議したこと覚えていています。私がキヤプテンになりましたが、その年の国体からかえり練習を続けていると、いつも必ずグランドにててきて中さんが、今日は自分たちで練習しろといおえてかえってしまうことが何回もありました。あとでわかったことですがその年の十二月に中さんが結婚し、その準備などで、また新婚生活を大切にしたことで練習の指導が毎日というわけにいかなかつたわけでした。

しかもその当時一年生部員が、何人かやめたいといつても中さんは私が高校教員になるものと期待していたのだと思います。

その後県の役人を経て政治の世界に足を踏み込んでしまい、その意味では中さんの期待にそわなかつたのかもしれません。

しかし、初めての選挙の時も手伝うよう後輩の諸君に声をかけて心配をしてくださったことにいまもって感謝

てきており私としては、練習の指導もとらなければならずかなり深刻に悩んだのです。しかし今となってみると、そのときに自分の進むべき道が決まったように感じ、あらためて中さんに感謝したいと思います。

三年のときには県のベストフォードにしかなれず大きな大会にいくことは出来ませんでしたが、卒業後数年にわたり毎日のようす湘南のグランドにかよい続け、レギュラーの指導は中さん、新入部員の指導は私が担当し、また大学在学中に高校の試合のレフリーもずいぶんやらされました。たぶん中さんは私が高校教員になるものと期待していたのだと思います。

# 1961-70

〈昭36～昭45〉

●国体県予選

三回戦 湘南 2-3 県鎌

●全国選手権

予選リーグ 2勝3敗

1967(昭和42)

●県下新人戦

三回戦 相工大附に敗れる

●関東大会予選(代表)

決勝リーグ 湘南 1-0 鎌学

湘南 0-3 相工大附

湘南 3-0 関東学院

●関東大会

一回戦 湘南 1-3 館林

●全国総体県予選

四回戦 湘南 2-5 磐子工

●国体県予選

準々決勝 湘南 0-3 鎌学

●全国選手権県予選(秋季大会)

湘南 0-2 浅野

1968(昭和43)

●県下新人戦

四回戦 湘南 1-4 三崎水産

●関東大会県予選

一回戦 湘南 0-0 多摩

●全国総体県予選

二回戦 湘南 1-3 城北工

●国体県予選

三回戦 湘南 2-4 藤沢

●全国選手権県予選(秋季大会)

ブロック優勝 湘南 1-2 向の岡

しています。

最近は、四十雀でボールを蹴つたりするときにお目にかかりますが、中さんのプレーは、二五で湘南に着任した当時とまったく変わっていないとよく感じます。

中さんは私にとつてよき兄貴であり、サッカーを愛する仲間であることを思いつつ、二八年湘南で指導されたその経験を新たな職場でおおいに發揮され、県教育界で、ますますご活躍されることを祈念します。

デ・ジャ・ヴー

四十回生 山田仁夫

たまたま中さんは、酒を汲み交す機会の多い僕ですが、今だに何故か、お互いに触れ合わない試合のことがあります。

高校サッカー生活三年間の総決算でもあるインターハイ予選決勝。対鎌倉学園戦である。

あのローランドで、試合前の練習をしていた僕らの集中力がだんだん何かの方向へと薄れて行つたような記憶が残ります。試合開始時間になつても、相手である鎌学の選手が唯一人姿を見せないので。その内に我々の間でささやかれ始めた声が『不戦勝!』であった。何

# 1961-70

〈昭36～昭45〉

1969（昭和44）

●県下新人戦

準々決勝 湘南 0-1 相工大附

●関東大会県予選

二回戦 湘南 1-2 Y校

●全国総体県予選

二回戦 湘南 0-1 多摩

●国体県予選

決勝 湘南 1-4 相工大附

1970（昭和45）

●県下新人戦 予選リーグ負け

●関東大会県予選 決勝リーグ負け

やうと話を始めた中さんと大会役員、そして芝に座り込んで待つ僕等の顔には緊張感の取れた笑みすら見え始めていた。突然サドンリー・ハップン（トニー谷『チャンバラマンボ』より抜粋）、あの『猪木ボンバイエ』のテーマに乗って現われる黒い人影。手には当時一世を風靡したあの青と白に色わけられた『ヤスダ』のボストンバッグを手に、まるでブルーのカナリヤに襲いかかるカラスの軍勢のように鎌学の選手が現われた。すでに試合開始時間より十五分は経過していたように思われる。半信半疑のままに遠くの方に聞こえる試合開始のホイッスル。たて続けに揺れる自軍の白いネット。置いていかれることのない相手センターフォワード（実にレトロなレトロな響きの言葉である。）のスピードについて行けず呆然と立ち尽くす自分の姿。全てがスロー・モーションの中の悪夢のよう思い出される。

これまで遠くの方に聞こえる試合開始のホイッスル。たて続けに揺れる自軍の白いネット。置いていかれることのない相手センターフォワード（実にレトロなレトロな響きの言葉である。）のスピードについて行けず呆然と立ち尽くす自分の姿。全てがスロー・モーションの中の悪夢のよう思い出される。

結局四対二の思わぬ大差で敗れ去り、試合後の中さんの言葉、『三年生はご苦労さんでした。』を聞いて思わず涙が溢れました。その涙の冷たさがきっと脳細胞を刺激したのでしょう。受験勉強も一切せずに続けてきた三年間のサッカー生活を思い出し『そうか最後の試合だったんだ』とやっと我に返れた有り様でした。その日の後のことばは僕の記憶の中には一切よみがえっては来ませんが、唯一同期で最後までプレーした奥村によれば、何人かの仲間と江の島に行き、夜半まで飲めない酒を口にして飲みつぶれていたようです。

今想えば、同じ頃、中さんもどつかで誰かと酒を飲み交していたことと思います。

相手の『試合放棄』も成立したはずです。まともに戦っていたらインターハイに登場していただかも知れません。お互い、何かにがい記憶なのでしょう。お互い、あれで良かつたんだと思っているわけでしょう。お互い、別々の場所で別々の人と同じ時間に酒を飲んでいた日――。たまたま中さんは、酒を汲み交す機会の多い僕ですが、今だに何故か、お互いに触れ合わない試合のことがあります。

お疲れ様でした。よかったです。ありがとうございます。

# 1961-70

〈昭36～昭45〉

## 四泊五日水戸宿泊記

### 四十五回生 渡辺象次

本当のことを言えども、あの時の旅行はせいぜい二泊がいいとこ、三泊できたら御の字と思っていたのが大方の気持ちであろう。神奈川で優勝のつもりが、気の抜けた試合をして、二位に甘んじての関東大会出場であった。

あの時、中さんになつぱり叱られたのを憶えている。そんな時はよくしたもので岩さんから慰められ、また時には一人が逆の立場をとり、僕等はアメとムチで少しづつ進歩していったような気がする。

今、手元に二十数年前のトーナメント冊子がある。第八回関東高等学校蹴球選手権大会。もうボロボロになってしまったが、今でもしつつこく持っている。ここまでくると、もうごみ箱の世話になるわけにもいかず、今回のように役に立つこともあるし……。

あの時の優勝が二十数年の時を超えて、僕の心に甦る。それはまさしく心の宝。優勝したから宝なのではなく、十代の一時期をひたむきに生きたその証が優勝という二文字に結晶したことが宝なのだと思う。思うに、あの頃の自分は不様であり、赤面の連続のような生き様であった。そこに宝が生じた。そのきらめきの向こうに見え隠れする人が中さんであり、岩さんである。僕にとってこの宝は救いであり、中さん、岩さんは救い主ということ

になる。

冊子をそっとめくってみると、

大会第一日目、前夜の雨で試合会場はたんば、さながら僕等は人間耕うん機である。中さんの指示でボールを早めに前線に出し競りあうが、思うにまかせず一一の分け。当時PK戦はなく、抽選である。三泊とは言わながせめて二泊、いや一泊でもしたい。だのに抽選。両キヤプテンが主審のところへ歩み寄る。瞬間の静寂。くじを引く。と、井出（二つ木）が両手を上げてガッツポーズ。僕等は喜ぶというよりもホッとし、やっと肩から力が抜けた。

大会一日目。強い日差しの中、千葉高を相手に四得点、油断して一点取られたが、前日とはうつて変わつて余裕の勝利である。

大会三日目。前日の相手もそうであったが、今日の相手、川口高のディフェンダーが戸惑っていた。いつもと勝手が違いまークする相手がわからないのである。中さんはこの大会の二・三ヶ月前に四一二一四システムを採用、僕等は戸惑いながらも何とかこれを理解し、当時としては最先端のシステムをこなそうとしていた。戸惑う川口高に対し前半二点先取、中さんは調子に乗つて後半はツートップを指示、それが図に当たつてさらに一点。相手の一人が「俺のマークがいねーよー。」と試合中にどなつていたのが印象深い。

大会四日目。ついに三泊してしまった。この頃からではなかつたか。旅館代が底をつけはじめ、苦労して集金がなされたと聞いている。勿論、現役の僕等には何も知

# 1961-70

〈昭36～昭45〉

らされず、後輩はよく洗濯してくれるし、当時なりにうまいものは喰えるし、今懷えれば、回りの人たちのお陰であり、感謝、感謝で終始するのが当然なのだが、若さは思慮分別をわきに追いやってしまうものらしく、ただ偉そうに騒がしく振る舞っていたと記憶する。

試合は対宇都宮学園。この試合が最も苦しかった。相手は全員丸坊主、試合中にマーク相手の右ウイニングの選手から「テメー、後でタイチで来いな。」と喧嘩をふつかけられたのもこの時が初めて。タイチとは何のことだろうと試合中に悩んでしまったが、試合後、仲間に「対一」とことで、「一対一」のさしで勝負することと知った。ただ残念なことに?、延長の末〇—一で彼のチームは惜敗し、すぐに帰ってしまったのでタイチは実現しなかった。

大会五日目。いよいよ最終日。前夜は皆一様に興奮しているのだが、それを隠すかのように一段とはしやいでいた。選手宣誓とか、高校生らしくといつても、この年代は女性に興味を持つ年ごろであり、旅館での僕等の言動も知れようというもの。

五日目の早朝、中さんは僕等を偕楽園まで散歩がてら連れてつてくれた。梅の季節には関係ないので閑散としていたが、昂ぶる気持ちと園のかもしだす穏やかさの間で、なるようにしかならないといら開き直りに似た心の落ち着きを感じたものである。

対帝京高校。相手にはユース代表格の選手もあり、当然押されぎみの試合となつた。右サイドバックの小泉は相手をケズル名人で、今度も相手の中心選手であるレフ

トウイングを痛めつけ、その選手が後半は逃げるようになり、右サイドに移ってきた。僕としてはいい迷惑である。たしか二回ほどきれいに抜かれたと記憶する。ところがこれも計算のうちで、スイーパーシステムが有効に働き、センタリングあげさせたケースはほとんどなかつた。ついに後半?分、左からのセンタリングにジャンプ一番、右ウイニング中里がヘディングシュートを決め虎の子の一矢。あの瞬間の喜びは一体何に例えればいいのだろう。今思い返しても、体じゅうを駆け回った快感や駆け寄つて行つた時の皆のこぼれるような笑顔が鮮烈に甦る。

優勝! 皆があこがれ、でもそんな事あるわけないよとおもつていて出来事、これを事実として受け止めることには少々時間という飲み薬が必要であった。もっともこの薬は効きすぎてやたら涙腺を刺激したのには困つたが。生まれて初めて心から胸上げしたいという欲求にかられ、中さんが四度、五度と宙に舞う。次に当然、岩さん、ところが彼はかたくなに拒否。逃げまどうありさまざま、ついには水の入つていたバケツをけたおしてしまい、僕等も諦めた。しかしあの時の岩さんのとった態度はとても岩さんらしく思え、一方あの巨体を持ち上げずにすんで返つてよかつたのか……。

## エピローグ

帰りの車中、山田先輩から、昨夜の祝い酒の席で中さんが泣いたと聞き、僕等はただ黙つたまま何度もうなづいていた。

もう薄っぺらなこの冊子にめくるところはない。二十

# 1961-70

〈昭36～昭45〉



数年をへた今、立場上は中さんは湘南サッカーから離れたかも知れないが、中さんが築いてきたものは湘南サッカー部に脈々と息づいており、さらに今の僕が人生の何割かをサッカーに注いでできること、そしてまずいことにそのことを全然後悔していないということは、やはり中さんに巡り会えたからなのである。

今、湘南サッカー部には藤塚君というよき後継者がいる。彼も中さんの教え子であり、テレビで田村が彼に抱きつくシーンを観て、幸せな奴だなーと思った。

中さん！ ゴルフはほどほどにして、まだまだ一緒にサッカーをやりましょうよ。

最前列が関東大会制覇のメンバー



# 1961-70

〈昭36～昭45〉

## 白いポロシャツ

四十五回生 黒沢秀樹

時間の経過と人の思考との間には、何か相容れぬ要素があるような気がしてならない。何も小難しい話をする、積りは毛頭ない。先日、相羽克治君が、植松二郎君の千歳国際マラソン快走応援のついでにわざわざ札幌までの原稿を取りに来てくれたのに私は書けなかつた。彼は植松君が走っている間、タオルを2本持って丸駒温泉の露天風呂にいたといふ。詳細は後日にするが、この腹の筋肉の引きつる逸話が発端となつた。

前書きが長くなつた。つまり、鈴木中先生（以下中さんと略す）と私が、高一：中さんが二十代のときに初めて出会つたこと、高二：ケネディ米大統領が暗殺された日に、全国大会出場をかけた決勝戦で敗れたこと、高三：関東大会で優勝したことなど、高校時代の出来事がの中では少しも熟成せず、原材料のまま残つてゐる。楽しくもなく、辛くもなく、淡淡として思い出される。

司馬遼太郎の「酔つて候」の主人公は三十歳を過ぎたばかりでちつ居させられたかと記憶している。初老は四十歳の称である。最近、かつての名選手が年とともに衰えていくことを街いもなく理解できる。中高年のスポーツはランニングや水泳のような有酸素運動が適しており、相手との勝負を競う格闘技は避けた方がよい、と自信を

持つて話したりする。以前、OB諸先輩が少年の私達に語った内容は殆ど覚えていないが、なんでそんなことを言うのか、この頃その気持ちが少し解るようになつた。少し、もっと個人的に勝手に語らせて欲しい。今年の正月の大会に出場した選手諸君と、湘南サッカーの伝統を築いた私より年上の先輩諸兄と今日まで湘南サッカーをなんとかしようとした人や少しでも湘南サッカーの存続に貢献した人に感謝したい。PK戦勝利後、かつての仲間と飲んだ酒がとてもうまかったからである。後輩諸君、また再びおいしい酒を飲ませて欲しい。

私の湘南高校時代のサッカーの先生は岩淵二郎先生と中さんであった。ガンブチさんはゴールのポストやバーにボールを一度当てるから得点するシュートを教えてくれた。そして私が東大に合格した時、「やってみるもんだな」と一言いわれた。中さんは、練習着のないことを探理に練習を休もうとした私に、白いポロシャツをくれた。いまなお目の覚めるようなその白さの褪せることはなく、夏の陽は相変わらず暑い。

# 1961-70

〈昭36～昭45〉

## 二十三年前の全国大会

四十二回生 小川和夫

(旧姓 及川)

我々、四十二回生は、昭和三十九年、東京オリンピックの年に入学しました。最初、四、五十人が入部、このうち、最終的に残ったのは十二人でした。

時間を追って、我々が湘南のサッカー部にいた三年間の足跡をたどってみます。

### ▽二年生の関東大会まで

毎年のことでしょうが、我々の代も、はじめはかなりの人数でした。当時、中学校にサッカー部のあるところは、まだ少なく、経験者は三割ぐらいでした。ボールを

蹴つたことがないばかりか、試合さえ見たことがないという者もいたほどです。そんな状態から出発して、夏休みに入るころには、少しはボールも蹴れるようになっていました。

この夏休みには、関東大会代表として館林へ、そして練習試合のために、藤枝へ遠征しましたが、我々一年生も同行させてもらいました。試合の雰囲気に直接触れることができ、後にかなり役に立つと実感します。

この年は、三年生が山田さん、奥村さん、嵯峨さん、森田さんらで、あとは全て一年生でした。県内の大会では、常にいいところまで行きながら、後に全日本代表になつた吉水のいる鎌倉学園に、再三、苦杯をなめさせら

れました。しかし、関東大学リーグの二部のチームなどと戦つても、そこそこの試合をしていましたから、ある程度力はついており、それが翌年の関東大会優勝となつて実を結んだと言えます。

二年生になった七月、水戸の関東大会——泥んこのグラウンドで戦つた一回戦。度の厚いメガネをかけていたGK佐藤さんのために、沢地がゴールポスト脇に立ち、何回もメガネをふいては手渡していた光景が思い浮かびます。

対宇都宮学園戦で、関口が決めたヘディングシュートなどとともに思い出すのが、鈴木先生のとられた作戦のことです。川口との試合だったか、"WM"から、当時まだ一般的でなかつた「4・2・4」のようなフォーメーションにガラッと切り替え、見事に相手チームを戸惑わせました。

### ▽全国大会県予選と本大会

関東大会優勝のチームに、我々二年生の中からレギュラーとして入つていたのは関口ただ一人でした。そして、三年生が引退、いよいよ私達が中心となつた新チームがスタートしました。

### 県予選（昭和四十年十一月）

2回戦	湘南	3-1-2	小田原
3回戦	湘南	2-1-1	(延長)
準々決勝	湘南	3-1-0	相工大付属

決勝	湘南	2-1-1	武相
	茅ヶ崎		

緒戦は湘南のグラウンドで、相手は小田原。我が方は、

# 1961-70

〈昭36～昭45〉

相当緊張して、途中リードを許しましたが、3-12の逆転勝ちでした。

続く三回戦は、相工大付属と。チーム力はほぼ、互角だったかと思います。0-10のまま延長に入り、2-11で辛勝しました。内容をあまりよく覚えていないですが、相手の一年生エースだった田部井の弟に、かなり悩まされたものと思います。当時、湘南の定時制で教えておられた倉岡先生が相工大の監督で、試合後の残念そうな表情を記憶しています。

次いで準々決勝は、3-10で武相に準勝。この大会唯一の比較的、楽な試合でした。

1-0。後半、まずPKで1点リードした後、確か和田の準決勝は慶應と。前半は相手が押し気味でしたが、0

コーナーキックが直接入り、2-10。その後、逆にPKで1点取られたものの、追撃を振り切りました。

決勝は茅ヶ崎との対戦となり、場所は善行の県営グラウンドでした。前半十五分、左隅からのフリーキックを関口がヘディングで決めて先制し、その後も、FWがパスをつないで押し気味に試合を進めました。

後半開始早々、PKのチャンスをつかみました。しかし、和田が堅くなつて失敗、逆に相手にPKを決められ、同点になりました。けれども、最後、加納がキーパーへの(?)バックパスをカットして、ゴールに蹴り込み、勝負がつきました。この日のメンバーは次の通り(FWの左右が一部確認できず。交代の有無もはつきりせず)

GK 沢地、FB 坂部・猿渡、HB 田部井・広野・樺山、FW 高橋・和田・加納・関口・宮坂

当時の神奈川新聞を見ると、勝因として、守備が堅く、FWにユース代表候補の関口という切り札を持っていることが挙げられています。さらにチーム全体の評価として「一、二年生だけで編成したチームで、まだ迫力に欠け、動きもぎこちないが、もう少し得点力がつけば、基礎があるだけに、面白いチームになりそうだ」と書かれています。

予選終了後、本大会までは一ヶ月余りの期間がありました。この間に、全国大会に出場するには、一、二年生だけでは不安ということで、三年生五人がカムバックすることになり、大幅に入れ替わった陣容で本大会に臨みました。

◇

本大会は、明けて昭和四十一年一月、大阪、神戸、京都の三会場で開催されました。

大会の予想記事が掲載された昭和四十年十二月二十七日付けの毎日新聞が、手許にあります。「川口工、藤枝北が有力、実力接近で混戦もよう」という大きな見出しのそばに、「伏兵・頭悩のチーム湘南」という小さい見出しが出ています。やはり、関東を制覇した直後ということで注目されていたのでしょうか、チームのメンバーは替わってもいるし、買い被りすぎの感じはありました。でも一、二回は勝てるのではないかといったところではなかつたでしょうか。

正月二日に新幹線で京都に入り、京大医学部前の丸家(まるや)という旅館に泊りました。試合前の三日、バックの猿渡がケガをして出場できなくなるアクシデン

# 1961-70

〈昭36～昭45〉

トがありました。

この晩、宿で出場メンバーが発表されました。今、ニューヨークにいる高橋が、出場できないと知つて、ふとの中泣いていたのを思い出します。

翌四日、西京極競技場での対戦相手は滋賀代表の甲賀でした。当日のメンバーは次の通りです。

G K	沢地、	F B	坂部・渡辺、	H B	福井・杉本・広野、	F W	中里・加納・和田・関口・井手（現二木）
-----	-----	-----	--------	-----	-----------	-----	---------------------

湘南 14

G K

C K

F K

甲賀 5

4

13

（抽選負け）

湘南 0-1-0 甲賀高校

湘南 3-1-0 多摩

（決勝リーグ3戦全勝、1位で代表に）

「総得点二十に対し、失点なしという圧倒的強さ」（神奈川新聞）で、出場権を獲得しました。

関東大会（6月、甲府）

1回戦 湘南 2-1-0 北園（東京）

2回戦 湘南 1-1-2 宇都宮学園（栃木）

（ベスト8）

一回戦は一方的な試合で、もっと差がついてよい内容

でした。二回戦は、関口が執拗にマークされたものの、自在に相手を抜いていました。大部分、相手陣内で戦っていたのに、逆襲で二点先取され、後半終了数分前に一点返し、必死で反撃したが、及びませんでした。

そして、抽選負け。この時を皮切りに、新人戦、高校総予選と、我がチームは抽選で三連敗したのです。

今年の正月、久々に全国大会に出場した後輩たちの試

合を観戦しました。一回戦のPK戦による決着を見て、あらためて、抽選によらない現在のやり方の方が良いと確信しました。

それにもしても、関東大会一回戦を、抽選で突破して優勝をつかんだ一年上の代と比べ、ついていないと言える面もあつたと思います。

▽全国大会以降

一月か三月に新人戦に出場。準々決勝で相工大付属に1-1の末、抽選で敗れています。

関東大会県予選（昭和四十一年四一五月）

決勝リーグ最終戦

以下は五日付けの毎日新聞の記事そのままであります。

西京極の甲賀一湘南戦は、甲賀が強引な突っ込み、湘南はゆさぶり戦法で相対したが、肝心の詰めが悪く、延長に入つても一進一退。攻撃に計画性がなかつたのと軟弱なグラウンドのため、双方の持ち味が生かしきれなかったのがもつれた原因だが、チーム力が互角だっただけに、抽選負けした湘南の不運が惜しまれる。

記事はこれだけですが、「湘南は抽選負」と見出しにもなっています。

記録を見ると、押されていたように思われますが、終了直前、和田のフリー キックを加納が惜しくもヘディングしそそなったのを始め、チャンスもあり、勝つておかしくない相手だったと、今でも思うのですが…………。

そして、抽選負け。この時を皮切りに、新人戦、高校総予選と、我がチームは抽選で三連敗したのです。

G K 沢地、F B 山口・猿渡、H B 及川（現小川）。

# 1961-70

〈昭36～昭45〉

広野・田部井、FW 高橋・和田・加納・関口・樺山  
高校総体県予選 準々決勝

湘南0-1-0相工大付属

(延長の末、抽選負け)

この年から、高校総体にサッカー競技が入ったのだが、記憶がはつきりしませんが、いずれ、代表になれることは十分あると思いつつ予選に臨んだのですが、

ダメでした。対相工大付属戦は、梅雨の晴れ間の暑い日、草いきれでムッとする善行のグラウンドで、延長の末の敗戦となりました。岩渕先生に「せめて体を張ってプレーしろ」と叱られたこと、鈴木先生が「こういう結果も、いくつかの可能性のうちに入っていた」と言われたことを思い出します。

この試合を最後に、秋まで残った閑口を除き、我々四十二回生は全員現役を退いたのでした。



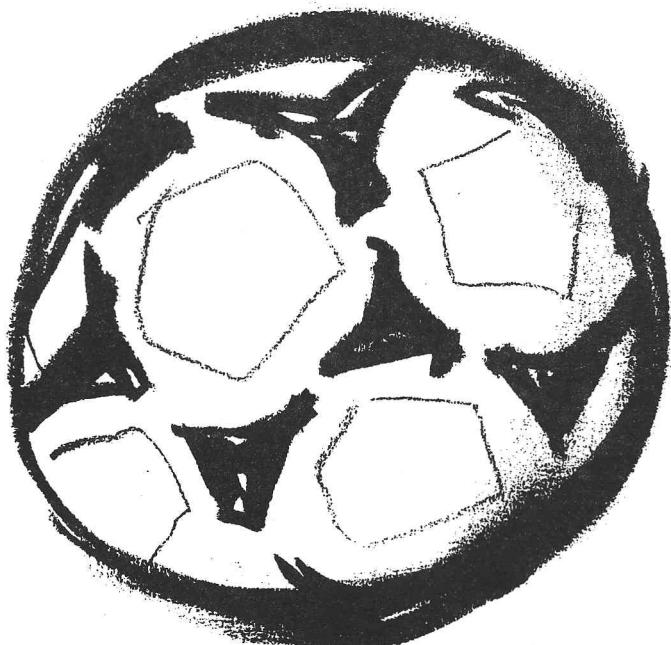
我々が指導を受けたころの鈴木先生は、スピード、テクニック、パワーとも十分で、マークするのは容易ではありませんでした。湘南のグラウンドで行われた教員チームの試合で、ハーフライン付近から四十メートル以上はありそうな超ロングシュートを決めたのを目撃したこともあります。指導者としての経験も加わり、充実した時期にあたっていたのではないかと思います。



今年六月のある週日の夕方、久々に藤沢から江ノ電に乗りました。今、鎌倉から東京に通っているので、そん

な時間に藤沢から江ノ電に乗ることはめったにありません。日が暮れかかり、家路を急ぐ人達で混み合う電車から、窓外の風景をながめつつ、湘南に通っていた頃も、時々、こんな時に、同じ様に江ノ電に揺られて帰ったことを思い出しました。そして、あの頃から今年の春まで、鈴木先生が、湘南のグラウンドにずっと立ち続けておられたことに思いがめぐり、何かしら、おごそかな気持ちになりました。

鈴木先生、本当に長い間ご苦労様でした。そして、有り難うございました。



# 1971-80

〈昭46～昭55〉

## 遠征アレコレ

四十六回生 隅山幸彦

このたび、鈴木先生が、湘南高校から転任なさる事を聞き、私は、驚きました。中さん（この文章の中では、

こう呼ばさせて頂きます。）は、湘南サッカー部になくては、ならない人であったのに……。

でも、私個人の考えですが、藤塚監督と言う、いい後継者に恵まれましたので、中さんの新しい人生の門出を御祝いしいたいと思います。

した。

しかし、湘南に入学したら、サッカーをやろうと思つていきましたので、恐る恐る入部しました。案ずるより産むがやすしで、皆さん御存じの通り、練習中は、厳しいですが、練習以外では、気さくで、何事も相談に乗つてくれる方です。私は、酒が飲めないので、諸先輩の様に盃を傾けて、話しをした事が、ありません。しかし、一度、中さんと温泉でも入りながら、在学中の事や今後の

中さんの抱負を聞きたいと思います。

ここで本題に入ります。私たち四十六回生は、諸先輩方のお陰で、何回も遠征に行きました。私が最初に参加したのは、一年の冬休みに静岡を訪れました。その時は下級生で、ましてレギュラーでなかったので、ベンチからの観戦ばかりでした。その時は、山口先輩のパンチが直接湘南ゴールに入つたり、同期の中山君の自殺点など、珍事がありました。中さんは、怒るのを通り越して、

1971（昭和46）

●関東大会県予選

四回戦 湘南 0-5 多摩

●全国総体県予選

一回戦 湘南 0-6 大和

●全国選手権県予選

一回戦 湘南 0-3 北陵

1972（昭和47）

●関東大会県予選

三回戦 湘南 1-2 日大

●全国総体県予選

三回戦 湘南 0-1 向の岡工

国体、県選抜選手に、曾我敏昌君、瀬戸康弘君選ばれ、ベスト8進出

●全国選手権県予選

一回戦 湘南 1-2 厚木

-1973（昭和48）

●県下新人戦

二回戦 湘南 0-2 関東六浦

●関東大会県予選

二回戦 湘南 0-2 鎌倉

●全国総体県予選

三回戦 日野に敗れる

●全国選手権予選

二回戦 湘南 1-2 向の岡工

1974（昭和49）

●関東大会県予選（ブロック決勝）

湘南 1-2 鎌倉

●全国総体県予選（ブロック準決勝）

湘南 0-2 県須工

# 1971-80

〈昭46～昭55〉

1975（昭和50）

- 県下新人戦  
決勝 湘南 0-2 相工大附
- 関東大会予選（ブロック決勝）  
湘南 0-1 希望ヶ丘
- 全国総体県予選  
四回戦 湘南 0-4 鎌倉
- 全国選手権県予選  
一次予選 湘南 3-3 生田

1976（昭和51）

- 県下新人戦  
一回戦 湘南 1-4 緑ヶ丘
- 国体県選抜メンバーに八木啓太君選ばれる。
- 全国選手権県予選（ベスト8）  
湘南 2-3 旭

1977（昭和52）

- 県下新人戦  
一回戦 湘南 0-1 港南台
- 関東大会県予選  
四回戦 湘南 0-1 茅ヶ崎
- 全国総体県予選  
二回戦 湘南 1-2 県横須賀
- 全国選手権県予選（ベスト8）  
湘南 0-2 日大

1978（昭和53）

- 県下新人戦（ベスト4） 第三位
- 全国総体県予選 第三位
- 全国選手権県予選（ベスト4）
- 準決勝 湘南 0-1 旭

むしろあきれ顔をしていました。今でも考えるとハプニングばかりで、面白かったです。当時のサッカー部員は、ユニークな人間ばかりで、中さんも怒つたり笑つたりの連続でした。

その静岡遠征で初めて私は、他校のチームと試合しました。（二軍戦でしたが）緊張のあまり、その試合内容は、全然覚えていません。でも、サッカーの面白さは、初めてわかつたと思います。中さんは、たとえ二軍戦でもベンチから見守ってくれ、注意を促してくれました。中さんの頭の中には、選手一人一人の技量や特徴をつかんでいるなあと感心したものでした。

次の遠征は、二年の冬休みに千葉へ遠征しました。その時にも、試合中にハプニングが起きました。同期の石井君が、千葉高校の選手と交錯して、二人とも倒れました。石井君はすぐに立ち上がりましたが、相手方の選手は、立ち上がらないのです。皆で注目していると、骨折したとの事で救急車が来たりして、てんやわんやでした。中さんの記憶力に感心した事が、又一つありました。それは、対習志野高校との試合に小柄ですが、サッカーセンスの良い小林君（四十七回生）を起用した事です。そのころ我チームは、スランプで、パスも全然つながらないし、全くダメなチームでした。しかし、小林君が入ると見違える様にパスがつながり、当時全国レベルにあつた習志野高校と互角に戦えました。それも中さんの鋭い洞察力だと思います。小林君と私は、いつもコンビを組んで練習していたのですが、スタミナが抜群にあり、私は、練習中はいつも助けてもらいました。彼は、新チームになつてから主将を務める程人望も熱い人間でした。当時、私と小林君は、兄弟みたいだと言われて、互いに迷惑をこうむったと思います。（これは、私だけの意見ですが……）。

# 1971-80

〈昭46～昭55〉

1979（昭和54）

●県下新人戦 地区予選

湘南 0-1 藤沢西

●全国選手権県予選 一次予選

1980（昭和55）

●県下新人戦

二回戦

1980（昭和55）

●県新人戦

湘南 0-1 藤沢西

●関東大会予選（ベスト16）

湘南 0-1 旭

最後の遠征は、二年から三年にかけての春休みに、広島・静岡に行つた事です。

## 監督のプロとは

四十六回生 湯浅健二

行きは、横浜より寝台特急に乗つて行きました。今様に言えば、皆ルンルン気分で、戦いに赴くような状態ではなかつたと思います。車中で、キセル（ただ乗り）の話が出て、特急はキセルが出来るか出来ないの話でもちきりでした。我々は、小田急の沿線は、いつもキセルに成功していましたが、長距離は無理だらうとの事でした。

しかし、中さんは、俺は、学生時代、東京・西鹿児島間を国電区間の切符でキセルをした事があると話していました。本当に当時の国鉄は、ぬけていると思います。先に紹介した、小林君が旅館で中さんと風呂が一緒になつた時、当時の流行歌（グッドナイトベービィー）を中さんが歌つてくれたそうです。後で小林君の話で、一応風呂の中ではうまく聞えたそうです。中さんの歌唱力を皆さんはどう評価しますか？

「鈴木ですが……」

「どうも、鈴木先生。わたし湯浅ですが、チュンさんの方お願ひしたいんです。」

「あれ……、湯浅さん知らなかつたんですか……？」

私が、ヨーロッパでの仕事を終えて帰つたのは4月上旬、帰つて早々、チュンさんに用事があつたため湘南高校に電話を入れたのだが……。

湘南高校の体育科には、もう一人鈴木先生がいる。出たのはそちらの鈴木先生だった。「チユウさん、荏田高校の教頭に赴任されましたよ。」

「エッ！！！」

「おまえのことだから、泣きべソでもかいてすぐに帰つてくるんじやないか。」

1976年、西ドイツ留学を決心して、鈴木宅にお伺いしたときの言葉だ。こちらは、「やるしかない」んだから、周りが何を言おうと関係なかつたのだけれど、チュンさんの言葉に対してだけは、「なに言つてんだ。泣きべソなんてかくもんか……」などと反発し奮い立つものだ。

サッカーは格闘技、ぬるま湯では何も生まれない。自

# 1971-80

〈昭46～昭55〉

分自身が闘わなければならぬ。挑戦しなければならない、それがサッカーダ。そこでは、喜び、友情に満ちたチームワークだけではなく、理性とは関係のない、一時的な怒り、苦しみ、そして憎しみ、そんな人間の暗黒面も、力の源泉なのだ。チュンさんはそのことも良く理解して我々を指導し、たまには挑発もする。

「意気地のないヤツだ」チュンさんの口癖である。

もちろん、挑発できるための基盤は互いの信頼関係だ。その基盤なしに挑発したり叱ったりしても、出てくるのはネガティブな反発だけだし、残るのは根深い不満や不信だけになってしまう。その時点では、「なにクソ、見てろよ」、そして終われば「良く頑張ったな」と握手し微笑み合える。そんな関係がいい。

学校の先生や監督はどうしても権力者にならざるを得ない。その権力を濫用すれば、選手達は「沈黙の民」となり、絶対に胸襟を開こうとはしないだろうし、そんな中で「結局は自分自身が闘うしかないのだ」という意識が高揚するはずもない。逆に民主主義的であり過ぎても「仲良しクラブ」になってしまう。そのバランスが大事だ。時には「オニ、徹底的にオニ」、時には「独裁者」、時には「心おきなく話のできる友人」、そして時には、「頼りになる親父」、そんな多面性が「サッカーコーチ」の指導力の基盤だと思う。

チュンさんはそんな多面性を持っている。教えられることが多い。もちろんそんなチュンさんの個性を再確認できたのは、自分が監督・コーチとして仕事を始めてからだつたのだが、選手に対し練習などでひとしきり怒鳴

つて挑発した後のアフターケア、そんなとき、チュンさんの顔が浮かぶことが多い。

まず徹底的に反発させる、そしてその反発の意味を考えさせる。これができることは並大抵のことではない。それが本当の反目につながつたり、監督の度量のなさでチームが崩壊してしまつたり、日本に限らずヨーロッパのプロの世界でも色々見てきた。選手を怒らせることができるということ、そして、選手が目を床に落としながら「はい、はい」などという雰囲気ではなく、お互いにオープンに話し合う中でのアフターケアを十分にできるということ、並大抵のことではない。チュンさんから挑発されること、現役最後の頃にはそれが励みにさえなっていた。

ヨーロッパでも屈指のプロ監督達、バイスバイラーチ、ツェヴィッヂ、ラテック……、プロの世界だから、監督や選手の興味の対象は全く違うにしても、彼らの中にもチュンさんにつながる部分を見付け出すことができる。徹底的なプロ、それでも選手権が「ストロング・ハンド」を欲していることには変わりはないのである。

我が師、鈴木、チュン、これからも色々とご指導を仰ぐことになるだろう。「意気地のないヤツだ。」その声をまた聞きたい。

# 1971-80

（昭46～昭55）

## 青春の指導者

四十七回生　田中　靖

めてくれた恩人だと思う。個人的な関わり合いの方は、各人毎に異っていたらうが、誤解を恐れずあえて言えば、私の同期生にとつても中さんの存在はそういう事ではなかつたかと思う。

正直言つて私が中さんの思い出を語ることについて同期生の中で最適かどうかは若干の疑問なしとはしない。なぜならば中さんの熏陶を受けていた頃の私は、主として内的な自己との葛藤に明け暮れ、本当の意味で自己と外部との戦い——他人との切磋琢磨に集中できなかつたきらいがあるからだ。従つて中さんの御指導が空回りした部分があつたと思う。現在では思い出すなつき汗顏百斗の思いもあるが折角の編集世話人の御指名なので、あえて私自身の目を通して見た中さんの姿を思い出しながら書いてみたいと思う。

岩淵先生は当時、湘南高校定時制の教師をされておられたが、サッカー部の初代キャプテンという事で厳然たる精神的影響を与えておられた。数々の名言を残された方だが、有力校との試合の後などよく『君らと彼等の差なんてそんな大きなものでないからがんばれよ！』と言われたのを覚えている。また、基本プレーに事の他厳しく、インサイドキック・トラップなどを自から模範を示されながら何回もくり返し練習させられた。中さんは、良い意味で岩さんの影響力を利用されていたと思う。私たちは、岩さんが来られると中さんの厳しい練習が中断され、どちらかと言うと、お話を基本技が中心の岩さんの御指導に一服の清涼感というか安らぎを覚えたものである。

逆にいえば、中さんの練習はそれ程、厳しかつた。

今では練習の細目はほとんど忘れてしまつたが、とにかくはサッカーを終生の追い求めて病まない夢にまで高い。結論の先取りになるかもしれないが、中さんは私にと

今では練習の細目はほとんど忘れてしまつたが、とにかくはサッカーを終生の追い求めて病まない夢にまで高い。結論の先取りになるかもしれないが、中さんは私にと

# 1971-80

〈昭46～昭55〉

かく走る事が多かったのが印象的だった。複数人で行う組織的バスプレー——その中には当時としてはきわめてハイカラなクリスクロスバスなども含まれていたが——

を二人組、三人組とおこない、逆サイドに移る。それからセントアーリングシート、一対一、二対一、三対三等々大変な走量である。

きわめつけは、最終メニューで時には中さん自からも参加し、大声で叱咤激励しながら百メートルダッシュ十回とかグランド十周などを行う。ここまで来ると最初の頃は『鬼』かとよく感じたものである。口ぐせが『バスアンドゴー』で全日本のコーチであったクラマーさんをよく引き合いに出されながら、この言葉を言われていたと思う。口さがない当時の私達は雨が降って練習が休みまたは室内トレーニングだけになる事をこよなく喜び、次のような歌をよく歌つたものである。

♪雨雨降れ降れ中さんが、車でお出かけうれしいな  
私が在籍していた時代の最高戦績は県大会一位、三位、四位であった。県大会での優勝を中さんにプレゼントできなかつたのが大変残念である。当時、私が二年生の時のメンバーは黄金時代の再来と一時言われた様にかなり充実していた。

周囲の期待を背にシーズン入り直前に広島から静岡にかけて大遠征が催された。広島で三戦、静岡で二戦、だつたかと思う。静岡では藤枝東高とも対戦し、当時から注目されつづあつた碓井選手とも一緒にプレーした。今では、青春時代の良き思い出だが、これだけのイベントを実行できたという事は中さんの類い稀れな周旋の才覚を

感じる。

当時、私は悲壮な観察しかできなかつたがこの裏には中さん及び岩さんの献身的な努力があつたと思う。中さんは湘南のOBでなかつたにもかかわらず岩さんのサポートもありOB諸兄の絶大な信頼を受けていた。また、当時から現在に至るまで県サッカー界のまさに重鎮であり続けているし、数多くのトッププレイヤーを育成すると共に湘南高校のレベルアップに意を用いられてきた。その結果が今年の高校選手権における輝やかしい成績につながつたと思う。

思えば、あと一步のところで私自身も含め燃焼し切らなかつたと思う。私など中さんから見ると御し難い『子供』だったと思うが、中さんは生徒の人格に応じ毒舌で叱咤したり甘言でおだてたりしながら、チームの和を作ろうとされていた。そういう意味では、むしろ青春後期から大人のチームを指導されていたら指導者としてもつと飛躍されていたかもしれない。だが高校生というきわめて情緒不安定な悍馬の世界にどっぷり身をひたしつつ常に理想のサッカーを説いてくれたその姿は、私達に何事にもかえがたい青春の思い出とサッカーへの熱い思いをふき込んでくれたと思う。

雑駁な思い出話となつたが、最後に心から御礼を申し上げるとともに、新任地における今後の御発展を祈念し終る事したい。大変、御苦劳様でした。

# 1971-80

〈昭46～昭55〉

## わが思想の師

四十八回生 細川周平

ぼくが湘南に入学した一九七〇年というのは、社会的には万博と安保の年、文学的には三島由紀夫の自決の年だ。

サッカー少年にとってはしかし、三菱ダイヤモンド・サッカーがメキシコ・ワールドカップを毎週放映した年といった方がぴんとくる。世界中でサッカー狂いに会つたが、特に歳ごろの同じ連中ならばこの大会を生涯のベスト・カップと推す人は多い。もちろん史上最強といわれるブラジルの圧倒的な強さがファンを魅了したことは確かだし、ドラマチックな勝負も多かった。しかしテレビ中継が五大陸をカバーした最初の大会で、メディアを通じての観戦者をいれば、それまでの大会のたぶん何十倍もの人々を同時に巻き込んだ大会だったことが重要だ。一つのボールにこれほどの視線が集まつたことはなかつた。ベッケンバウアーが腕を吊つて、とかバンクスのセービングが、とかいう話題がヨーロッパや中南米で通じるのも、このテレビ放送のおかげだ。人生觀を変える衝撃を持った番組といえば、この頃のダイヤモンド・サッカーをおいて他はない。この時期にペレと四年後にライフを見たことは、ぼくにとっては中学時代に

体験となつた。サッカー的に生きるとは何か、サッカーから始まる思想とは何かという哲学的なテーマの本まで書いてしまつたのだから、これは認めてもらえると思う。さて中学からの延長で高校に入つてすぐにサッカー部に入った。初日にその後たびたび悩まされる左足首の捻挫をしたのは、ぼくの運命を暗示していたのかもしれない。精神主義的で先輩後輩の挨拶だのなんだのがうるさかった中学（藤沢一中・裏中）と違つたのは、上級生の大人ぶりだつた。ぼくら一年坊を指導してくれたのが、隅山さんで、一年の体力に見合つた量の基礎練習をさせながら、上級生に馴染ませるのが彼の仕事だつた。小柄でちょっと猫背で小走りするフォームを今でも思いだすことができる。ぼくの代で彼に恩義を感じていらない人はいない。その時の三年生の主将は上野さん。後からきくに歴代の主将の中でもとりわけリーダーシップの取れる人だったそうだが、毎日の練習の後に彼からきく「講話」はすばらしいもので、たぶん結局は「精一杯やれば悔いがない」的な結論なのだが、春の県大会の試合を勝ち進むごとにいろいろと視点や目標を移しながらチームを引っ張つていくのがよくわかつた。彼が引退する時だつたかにいつたことは、きちんとワンツーパスを通してみるまでもなくわかるが、その時は彼がいふんだから本当にそうかもしれない、と思つてしまつた。ぼくも彼同様純真だった。そしてだまされやすい性格は今も変わらない。

# 1971-80

〈昭46～昭55〉

中さんがぼくら一年の顔を覚えたのはその三年生が引退したあの夏の合宿あたりからだったと思う。練習の後によく山口郁夫や瀬戸康弘なんかと彼の走るポーズや

といわれるかもしないが——わが「思想の師」ではないか。

口裏似をしたのを覚えている。どの学年にも剽輕者はいるものだ。ゆっくり間をはかる時とか長い距離を走る時にはちょっと前傾姿勢で一步一歩膝の弾力を試すような走り方で、腕の振りもずいぶんしなやかなのだが、いつたんボールに寄るとなると鋭角的な重心を移動して体を入れる。サッカーが最初の三歩で決まるというのを身をもって教えてくれたのは彼だった。それをぼくが実践できたとはいがたいが、そうありたいと願い、ターンや三対二の練習をした。

練習が終わるとそれまでグラウンドに集中していた中さんの気持ちの半分は体教に帰る。そして右手を上げてちょっとと回す。グラウンドを回ってこいという合図だ。何もいわなければ、その時の頃合で三周なのか五周なのかを察知するのは主将の役割だった。それが来るとほつとした。疲れてはいても後はただ走るだけでよいからだ。本当は練習が嫌いだったのかもしれない。

県選抜に曾我敏昌主将と瀬戸という二人を送りだしながら、ぼくらの代は大した成績は残せず、三年の夏前には引退した。その後あの時代ほど真剣に技術や体力の鍛練をしたことはない。たまに旧友に誘われて戯れに蹴つただけだ。もちろんぼくの思想にとってペレやクライヴを観たことは重要だ。しかしへたくそであれ自分で蹴つて走つて初めてわかることがサッカーにはあまり多い。そうであるならば、中さんこそ——そんなことまっぴらだ

哲学書房

細川周平



サッカーフィールド

時間・球体・ゴール

FOOL FOR SOCCER

# 1971-80

〈昭46～昭55〉

## 全員が教え子のチーム

四十八回生 関 佳 史

鈴木先生、ほんとうに長い間ご苦労さまでした。先生にサッカーの醍醐味を教えて戴き、いまだにボールの魅力にとりつかれている仲間『湘南ボーグームクラブ』の一人として、先生と僕らのチームの関わりを思い起こしつつ、感謝の言葉とさせて下さい。

一九八三年に、発足した当初は四十八回生が中心で、その前後のOBが参加しました。このメンバー達の現役当時の頃といえば、関東大会優勝の四十回、四十二回をピークに低落傾向にあつた時期で、おそらく、イレブンの編成では先生は相当頭を痛めたのではと推測します。今年の高校選手権で活躍した若木君や、結城君がフルバッケをやっているのをみると、僕達の時代には考えもつかない人材の豊富さを感じます。

確かに、当時は学区が現在よりも広く、湘南高校自体が現在よりもさらに受験志向でした。中学でめだつ選手がいても思うようには、高校へひっぱれない、また、勉強のため受験のためということで途中で退部していく仲間も何人もいました。今でも多かれ少なかれこうしたことあります。何年かよい結果のない年が続いたとき、先生のご苦労なさった時期だったと思います。

であるからして、多分このチームは『ヘタの横好き』の集りなのでしょう。しかし、クラマー体操やインターバル走、最後のグランド3周の苦しさ、セントアーリング・シユートを決めたときや3対2でバックを欺いてゴルを割ったときの快感——そして、体育館の前に立った中さんがギヨロッとした目でグランドのすみずみまでを見ている——こうした共通体験は、チームの成績とは別に皆が共有し心の奥に大切にしまつてあるものです。それを確認するために大の大人が、ボールを蹴りに集るのでしよう。

こうした共通体験だけでなく、サッカーの何たるかももちろん中さんは皆に教えてくれていました。ただ、僕は、現役時代は他の人に教わったことがなかつたので、高校の指導者は、皆、レベルが高いと漠然と思つていました。卒業後も、湘南クラブでやつていたのでそのことを痛感するのははずいぶんたつてからでした。特に感ずるのは、ボールを蹴る、止めるといった基礎と戦術レベルの間にあるもうもろの事柄が以外に指導されていないということです。例えば、『パスをしたら次にもらえる位置へ動く』、『トラップは敵のいない方向にする』、『フイニッシュの前段階にはスピードをあげる』、『パスをもらう前に動きを入れる』などといったサッカーのいわば『文法』的な部分を指導できる人が少ない。従つて身につけている人も少ない。極端に言えば、こうした『文法』を理解していない人とゲームをして面白くない。逆に、中さんに教わったもの同志でサッカーをすると面白い。ということになり、またまた集つてボールを蹴ることになつてしまふわけです。

# 1971-80

〈昭46～昭55〉

さて、チームのメンバーは現在約三十名。この中に、仕事に趣味にとサッカー関係者が多いのも、中さんのおかげということでしょう。

指導者では、綾北中で全国中学校大会準優勝の成績を残した山口晴夫さん（四十五回）、今年六月に二度目の神奈川県制覇をした湘南台中学の監督・中嶋修君（四十八回）、今年の正月が記憶に新しい母校の監督・藤塚久雄君（五十四回）など皆立派な成績を挙げています。

また、ドイツへサッカー留学し、読売クラブでコーチとして活躍した湯浅健二さん（四十六回）も最近は一緒にボールを蹴っています。関東大会優勝の先輩方からは、茅ヶ崎で少年の指導をしておられる渡辺象次さん（四十回）、日本リーグ住友金属のOBである関口真さん（四十二回）のお二方も参加なさっています。いずれも、一生サッカーとは、縁の切れない皆さんです。

変ったところでは、細川周平君（四十八回）。本職は、芸大につとめ、音楽学を専攻してますが、今年1月に、『サッカー狂い』なる空前の著作を世に送り出しました。著述、テレビ出演等多彩に活躍しています。そして筆者も、TVKで音楽番組担当でありながら、高校サッカー、ヨコハマカップなどサッカー関係企画には必ずかんでいます。また、青木猛君（四十八回）は中さんの歯の主事医です。

こうした、色々な職業に就いた面々が集り一緒にボールを蹴れるのも、中さんという共通項があつてのことです。そして、僕達にとって中さんは、時がたち色々な経験をしても、『先生』であり、いまだに、グランドにい

るだけで緊張感が漂い、試合中、声がすれば条件反射的に従ってしまう存在なのです。

グランドでボールを蹴ることが無上の喜びである以上、今後も機会あるごとに一緒にボールを蹴っていただこうとが僕達の願いであります。

お や じ

## 四十九回生 梁 永 叔



中さん、今考えて見ると、あなたは私がこの世に生まれて以来、父親以外に最初に出会った「男」の様に思ひます。グランドという同じフィールドに居ながら、越えてくても越えられない大きな障害物であった様に思いました。叱責に反発しながらも、操つられてしまうガキ大将の様に「俺は『父親』を越えたのか？」と真剣に考える今日この頃。

中さん。まちがつても校長先生にはならないで下さい。私のアプローチは、まだ続いているのです。

# 1971-80

〈昭46～昭55〉

グランド、教室、そして……

## 五十九回生 沢田ミヅル

がした。私たちのころはあの懐かしいバス&ゴーの応用やフォーメーションの練習が中心であり、正確なトラッピングとバスが命題であった。教えられている鈴木先生もきっと歯軋りされていたことと、今になって申し訳なく思ってしまう。監督としての戦術的な指導どころではなかつたはずである。

——サッカーの指導者として——  
昭和四九年六月、善行の体育センター「グランド」で横須賀工業に高校総体神奈川予選で負け、私たちの代は引退となつた。勿論何人かは残り、正月大会の県予選には望んだが、私たちの代が全員で戦つたのはこの試合が最後であった。

試合の後、体育センター内の食堂で先生より食事を御馳走になつた時の会話で印象に残つているのが『選手に守備は教えられても、攻撃は教えられない。攻撃は選手のセンスに負うことが大きい』という先生の言葉であつた。これは先生の持論のようであるがフォワードをやつていた私にとっては泣きそうな指摘であり、大変ショックであったのを今でも覚えている。

たしかに私たちの代は試合で大負けをすることは少なかつた。ハーフやゴールキーパーを含めたバックスの努力もあり、県で優勝はできなかつたものの、県大会ではそこそこまで勝ち上がつていった。今思えば私たちの代は、先生のその言葉通りのチームであった。

（「同期の皆さんごめんなさい」）

昨年、久し振りに数回現役諸君の練習を見させていただいたが、練習の最初から実戦の応用であり、隔世の感

——教育者として——  
鈴木先生との出会いはサッカー以外にもう一つあり、それは私たちの学年のクラス担任の先生としてであつた。私の場合には入学した年は鈴木先生担任のクラスであり、

# 1971-80

〈昭46～昭55〉

私たちの代は卒業するまでサッカー以外でも直接／間接的に接触があった。

正直に言つて、サッカーの面の印象が強すぎてどのようなクラス指導、学年指導をされていたかは記憶にないが、鈴木先生のクラスは比較的家族的なムードがあつたことから、生徒の中に充分浸透された教育をされていたのではないかと思う。蛇足であるがご父兄にも信望があるようである（鈴木先生のよく言われるセリフより）。教育者鈴木先生の一面を私ごとで恐縮であるが、ご披露したい。今でも感謝していることがある。

入学して数ヶ月たったころ、氣まぐれな私がサッカーチームを辞めたいと言い出した時に、「おまえは又、部に戻りたくなるから『休部』扱いにしておく！」と一言鈴木先生に言われてそのまま練習に出なくなってしまった。今でも何故、辞めくなつたのかは思い出せないが、何れにしても練習には出なかつた。ところが、数ヶ月後には先生の予想どおり、グランドでボールを蹴り始めていた。比較的すんなりと復帰できたのは、先輩や同期のメンバーの心遣いがあればこそであるが、一度辞めた様な状態の私が意地を張らずにもう一度やる気になつたのも先生の一言があつたからだと思う。この一言はサッカーチームの顧問の立場ではなく、おそらく担任教師として、私の性格を見抜いたうえでのものであつたように感じている。

御陰様で、サッカー部の素晴らしい仲間と今でも親密にお付き合いができる、かけがえのない親友達ができた。あらためて鈴木先生に感謝したい。

## —— 鈴木先生への提案 ——

出来の悪い生徒ほど、御世話をるのは世の常であるが、私はむりやり仲人までお願いしてしまつた。これは鈴木先生への感謝もさることながらお引き受け頂いた奥様に御礼申し上げたい。何故ならば、先生曰く『仲人をやるかやらないかは女房がきめる』とのことである。大変素晴らしい奥様に初めてお会いしたのは、私が高校一年のときに先生のご自宅であった。早いもので、もう二十年近くになろうとしている。

そこで鈴木先生へ提案！

『おそらく、先生が湘南高校におられた時は不在が多く、奥様と旅行どころではなかつたと思います。スーツ出勤を最近始められた鈴木先生、サラリーマンらしく、たまには夫婦水入らずで旅行でもいかがですか？ 南の島は奥様の好きなダイビングに最適です。』

鈴木先生の益々の活躍をお祈りいたします。

—— 出来の悪い教え子より



# 1971-80

〈昭46～昭55〉

神

髓

五十二回生 八木啓太

暑い夏合宿の夜であったか、グランドであったか記憶は定かでないが、中さんがこのように話していたことを思い出す。「俺は十年に一度選手権に出られるチームづくりをしたい。」三年という限られた時間しか与えられていかない身にとっては「何を呑気なことを……」などと思つたものであるが、今振り返るとこの言葉が中さんの神髄の一端であったような気がする。

中さんは自先の結果に一喜一憂しない。常に一貫して「理想の湘南サッカー」を基準にものを考えている。勝つても負けても点を取つても取られても表情はあまり変わらず、我々のやつしたことと、「理想」との乖離を指摘するだけである。知らぬ人が聞けば冷酷な血も涙もない監督を想像するかも知れないが、我々はこんな中さんに不動のものに対する畏敬の念を抱き男の頼しさと飾り気のない優しさを感じ、気づかぬ間に中さんに引き込まれてゆく。そして中さんが身をもって示す、首尾一貫した技術論・戦術論——サッカー観に毎日少しづつ染つていたような気がする。染つたとは言え、中さんは全員が同じムをひどく嫌つており、チームとしての目的意識の統一は強調しても選手の持ち味を埋没させることは決してし

なかつた。体が小さくすばしつこいだけの私をうまく使ってくれたのも中さんがいたからこそと思つてゐる。「伝統」という言葉はいかにも陳腐であるが、單に歴史が長いということに留まらず、暗黙のうちに This is SHONAN SOCCER という中さんと選手のあいだの意志統一が連綿と伝えられ今日まで至つてゐるという意味において、湘南サッカーのよさはまさに「伝統の力」と言えよう。こうした伝統を学生が受けついでゆくシステムを卓越したサッカー観と何にもまして頼りがいのある大きな人間性によりつくり上げてきたことが中さんのいちばんの功績ではなかろうか。

六十三年十一月十三日三ツ沢での選手権県予選決勝でいかにも湘南らしい勝ちを収めたときの私の時代には残念ながら見ることのできなかつた中さんの会心の笑顔を忘れることができない。そこにはこの日選手権出場を果たしたという結果のみならず、自分が育てあげた湘南サッカー全体の勝利であるという満足感があつた。そして何よりも、自分の教え子である藤塚先生が指導したいわば「孫」たちの頑張りでもぎとつた「勝ち」が中さんにとつて、一番嬉しかつたのではなかろうか。

彼の残してくれた財産を正しく受継ぎ更に育ててゆくため、現役・我々OBひとりひとりが何をすべきかもう一度自問しなくてはならぬと切に思う次第である。

# 1971-80

〈昭46～昭55〉

今年の正月はよかつた

五十三回生 武 藤 俊一

月の全国大会は湘南といきたいものだ。鈴木、藤塚両先生への我々の希望であり、また、両先生にかけられた指令でもある。ぜひともがんばって（がんばらせて）もらいたいものだ。

「最後に……」

中さん！いろいろとお世話になりました。そして、これからもよろしくお願ひします。

久々の全国大会出場で、仕事をほっぱらかしてみんなが集まつた。母校の応援にこれほどまで熱中できるとは思わなかつた。

スターディングメンバーの背番号と名前をおぼえてしまつたものもいる。試合のあとで飲んだ酒はうまかった。まるで自分たちが試合をしたあとのように……。このすばらしい正月をプレゼントとつくれた藤塚さん、後輩たち、そして中さんに……感謝・感謝！

「今年の春はフクザツだった！」

ふと新聞をみると中さんの移動がのつていた。荏田高校の教頭になるとのことだった。めでたいようで残念なようなフクザツな気持ちだった。我々が現役時代の中さんはまっ黒（まっ赤）な顔をしてグランドを走りまわっていた。よく先輩が酒やけの顔だといっていた。今もまつ黒な顔はかわらないが、髪の毛は白くなつた。歴代のO Bがいろいろと苦労をかけたからかとよけいな心配をしてしまう。あまりふけこまないようサッカーにそしてゴルフに打ち込んでほしいのだ。

「これからの中さん！」

中さんが荏田高校へうつったからにはこれからの高校サッカーの神奈川代表はインターハイ湘南荏田そして正



# 1971-80

〈昭46～昭55〉

## 二 対 一

五十四回生 篠塚 毅

悲願の全国大会出場を見届けられたのご榮転、誠におめでとうございます。もし、我々の時代のチームカラーがそのまま残っているとしたら、県大会を勝ち抜き、全國ベスト十六という成績は、まさに鈴木部長、藤塚監督の指導の賜物と言うほかないと思ひます。（藤塚監督はたまたま我々の同期であり、残念ながら全国区で最も早く出世してしまった）

今、私は勤務の部合でニューヨークに在住しておりますが、ともすれば殺伐とした毎日にあって、湘南の活躍は大きな喜びであり、何か“心の支え”とも言えるものでした。（実際、当地の日系紙＝日本と同時印刷されています）を見ては、“又、勝ちました”と職場中にももちろん米人オフィサーにも触れまわっていたほどですさて、話が私事になってしましましたが、十年前（もう、もう十年も昔なのです）。我々のサッカー、そして中さんを思い出してみたいと思います。結果から言えば、我々は県大会準決勝のカベを破れないチームでした。（新人戦、インターハイ、選手権とも三位）しかし、試合内容たるや、へたすると一回戦負けもありうる、言い方を変えれば、楽な試合など一試合もない、良く言うと“負けない”チームだったのです。当勝は、“中さんが全て”

のチームでしたが、中さんの指導は全く一貫していました。“一対一で勝てないのなら二対一で勝て、サポートを考えよう”これが有ったればこそ、チーム一丸となって勝ち抜いていけたと今、実感しています。（しかし、あまりに二対一を意識しすぎて“俺は一対一では勝てないんだ”と誤解するものもいましたが）、このバックボーンに加え、異常にハッタリが強く、負けず嫌いのメンバーが集まることで、肉づけができる一人前の体になりましたのでしょう。

中さんは決して“アメで選手を踊らせる”タイプの監督ではありませんでしたが、常に我々の感情を気にとめてくれました。一つのエピソードを紹介します。我々は選手権の準々決勝を控えその練習の為に修学旅行をスキップしようとしたが、全職員の反対をうける中で、我々の意思を尊重し、サポートしてくれ、しかもその翌日、京都遠征（その時の修学旅行は京都、奈良だったのです）というプレゼントまでくれたことは今でも一番の思い出となっています。

“中さんのいらない湘南”をイメージするのは実に難しく、又、さみしいことです。中さんの教えはいつまでも、湘南のイレブンに引き継がれていくと確信しています。

# 1981-88

〈昭56～昭63〉

## チーム雑感

1982（昭和57）

●静岡サッカーフェスティバル

2勝2負2分け

●付属定期戦

湘南 0-1 付属

●浦高定期戦

湘南 1-2 浦和

●高校総体県予選（2回戦）

湘南 0-1 翠嵐

●全国選手権 地区予選（準決勝）

湘南 1-4 大和

●新人戦中央大会

湘南 0-3 相工大付

1983（昭和58）

●新人戦中央大会（1回戦）

湘南 0-1 伊忌田

●静岡フェスティバル

3勝1負1分

●付属定期戦

湘南 7-0 付属

●関東大会予選（決勝）

相工大に負け（準優勝で代表となる）

●本大会（1回戦）

湘南 0-6 帝京

●全国選手権予選（準優勝）

湘南 1-2 鎌倉

チームの主な戦績	
新人戦	湘南地区大会優勝 決勝対茅ヶ崎五一
新人戦	ベスト16 対日大 ○一二
関東大会予選	ベスト8 一回戦 対日大 一一〇

チームの特徴としては、特に素質的に優れた者もいないが一人一人が自分達の長所を生かし仲々まとまつたチームであったと思う。惜しむらくはパワー不足と得点力に欠ける点で強い相手と当たっても弱い相手と当たっても常に接戦を演じた。

五十六回生 水上雅樹

インターハイ予選四回戦 対富岡 一一  
選手権予選 ベスト8 対鎌倉

準々決勝対相工大〇一二  
対富岡 一一  
PK負け

この中で特に印象に残った試合は、関東大会予選の一回戦の試合であった。相手は日大、我々は新人戦のベスト十六位で彼らに破れ、この時の試合が尊敬する大先輩であった岩淵先生が我々の試合を見て下さった中の最後のものとなつた。

中さんのことばを借りるならば、今度の日大戦はいわば岩淵先生への弔い合戦でもあり、チームのメンバーもそれを十分に心得ていた。試合は雨中での熱戦となつたが、日大の攻撃をシャットアウトした湘南は終了際、上園のセンターリングを私が得点し勝利を収めた。雨中の接戦に勝ち、中さんも喜んでくれたことはいうまでもない。

# 1981-88

〈昭56～昭63〉

## 地獄の天女

五十七回生 一星光利

以前に中さんの唄うサッカー小唄というのを聞いたことがある。

「湘南に入つて来て♪～サッカーやれ、サッカーやりや  
♪～地獄で天女が抱きしめる♪～あそれ～だ～きしきめ  
る♪～だきしめる♪～」  
今考えるに、『地獄の天女』とは中さんそのひとではない  
かと……」

「最初の練習」

私が長後中学校を卒業して最初に湘南に練習を行つた  
春休みのミーティングのとき、「お前がこのなかで一番年

上にみえるよ！」と当時もみあげのはえていた私は言わ  
れた。  
「恐怖の十四秒ダッシュ」  
最後のダッシュでストップウォッチを持っている中さ  
んを見たとき、『鬼』だと思った。しかし、私たちがダッ  
シュをしているときに、女の子に優しくなわとびを教え  
ているのを見たときは、『本当の鬼』だと思った。

「口癖」

『いかーん』、『つっかけい』――中学校でサ  
ッカーチームの顧問をしてる私にとって、このふたつの言葉  
は試合中には欠かせない。

「清水遠征とトンカツ」

私が三年になる春休みの清水遠征でのこと。唯一スイ  
ーパーとして出してもらった試合で取られた点の多いこ  
と。その日の夕食中に『おい、一星！』と呼ばれたとき  
は、冷やっとしたが、『これやるよ』と差し出されたト

1984（昭和59）

●新人戦中央大会（3回戦）
湘南 0-1 金沢
●静岡フェスティバル
3勝1負1分
●付属定期戦
湘南 2-1 付属
●関東大会予選（3回戦）
湘南 0-1 日大
●総体県予選（2回戦）
湘南 1-2 厚木
●全国選手権一次予選（4回戦）
湘南 0-1 日大
●浦高戦
湘南 0-0 浦和

1985（昭和60）

●新人戦中央大会（1回戦）
湘南 0-0 桐蔭 PK 1-3
●静岡遠征
3勝2負1分
●付属定期戦
湘南 1-0 付属
●関東大会予選（3回戦）
湘南 0-2 藤沢北
●総体県予選（3回戦）
湘南 0-1 大清水
●全国選手権予選（3回戦）
湘南 1-2 相工大付
●浦高戦
湘南 0-2 浦和

# 1981-88

〈昭56～昭63〉

1986 (昭和61)

- 静岡遠征  
2勝2負4分
- 付属定期戦  
湘南 1-0 付属
- 浦高戦  
湘南 0-1 浦和
- 総体県予選 (5回戦)  
湘南 0-1 七里ヶ浜 (ベスト16)
- 全国選手権予選 (4回戦)  
湘南 0-2 日大藤沢

1987 (昭和62)

- 新人戦中央大会 (決勝)  
湘南 1-1 相工大付  
(両者優勝)
- 静岡遠征  
4勝2負2分
- 付属定期戦  
湘南 0-6 付属
- 浦高戦  
湘南 1-1 浦和
- 選手権予選  
湘南 0-3 日大藤沢 (ベスト16)

ンカツは不思議な味がした。  
**「平塚競技場での出会い」**  
 昭和六十二年度の中体連サッカー大会の決勝戦のとき  
 平塚競技場で中さんと顔を会わせる。私は平塚の中学校  
 のサッカー部顧問をしている関係で会場の準備にあたっ  
 ていたのだが、中さんが県のサッカー協会として優勝校  
 に技術指導に来ていた。その後、ソウルオリンピックの  
 最終合宿で全日本と東邦チタニウム戦のときも会う機会  
 があつた。とにかくサッカーづけの生活は変わらないよ  
 うだ。

## 「四月一日付人事異動」

この業界（教師）をしているものにとって三月三十一  
 日の朝刊ほど楽しみなニュースはない。が、今年ほどビ  
 ッグなニュースはなかった。『荏田高校教頭・鈴木中』  
 という文字を見たときの驚きは『教頭先生になつたのか』  
 というより『どうどう湘南を去つてしまふのか』という

ものだった。この業界では教頭という仕事ほど大変なものはないのではないか——と思う。健康に気をつけてますますご活躍されることを心から願いたい。  
 また、現在私が平塚市立神田中学校サッカー部顧問としているのも、中さんの指導の下で湘南でサッカーをすることができたためであり、そのことをこの場を借りてお礼申し上げたい。



# 1981-88

〈昭56～昭63〉

## 関東大会無情

### 五十九回生 神崎 章

1988（昭和63）

#### ●新人戦中央大会（準決勝）

湘南 1-2 桐蔭

#### ●静岡遠征

4勝4負

#### ●付属定期戦（40回）

湘南 2-0 付属

#### ●関東大会予選（決勝）

湘南 0-4 藤沢西（代表となる）

#### ●第31回関東大式

湘南 1-2 武南（埼玉）

#### ●総体予選

湘南 0-2 藤沢北

#### ●全国選手権呼選（決勝）

湘南 2-1 県相模原（代表となる）

私が初めて鈴木先生に会ったのは、中学二年生の時だつたと思う。湘南と練習試合をさせてもらつた時、試合後、紺のウインドブレーカーを着た先生は、背の高い選手の間をすり抜け円の中心に立つと、試合の内容について何やら語つた。やがて、私達中学生の方を振り返ると、「湘南の生徒は、勉強もするがサッカーも精一杯やってゐる。湘南でサッカーをしてみないか。」と言われた。その時自分が何を感じたかは忘れてしまつたが、それが初めて先生に会った日の思い出である。

ところで、私達五十九回生というのは、昭和五十八年、

十七年ぶり出場の関東大会で帝京に大敗したあの代である。入学当時は、湘南地区の中学校が神奈川を制しており、高校にもその流れが来るのは明らかであった。私達はある程度その流れをくんでいたので、先生も期待をかけて育てくれた。当時、先生の口癖は、「サッカーは、三歳生位にならないとわからない。卒業してから、やつとわかる者もいる。」というものだつた。当然、私達はその言葉の真意をわかるはずもなく、ただ先生の言う通りにプレーするだけであつた。

やがて、神奈川では、湘南地区の公立校が台頭し、湘南地区同士の決勝も珍しくなつたが、湘南の名前はいつまでたつても出て来なかつた。私達も悩んでいた時期であつた。先生の言葉も素直に聞けなくなつていた。「サッカーで一番大切なことは……。」というのも、先生の口癖だつたが、なぜか、一番大切だということがいろいろとあつた。しかし、先生は、そんなどん底にあつたチームを、徐々に盛り上げてゆき、やがては神奈川の決勝に顔を出すまでに成長させた。そのきっかけがどこにあつたのか見極めるのは難かしいが、私は、二年の冬の終わりだつたと思う。先生の態度が、明らかにそれ以前とは違つていて、激しく怒ることも多くなつていった。春になると、先生は選手の成長を実感したのか、今度は、チームをほめる数が怒る数より多くなつて來た。その後の予選を勝ち進み、関東大会への切符を手にするまで先生は多くを語らなかつた。ただ一言、二言チームをほめるだけであつた。選手は関東大会出場に喜び、浮かれていたが、先生は違つた。今思うと、関東に向けて一番燃

# 1981-88

〈昭56～昭63〉



えていたのは先生自身だったような気がする。まして、相手が帝京と決まるとき、私達が戸惑う程の厳しさを表に出了した。しかし、私達は、時々見せる先生のやさしさに甘えてしまい、チームの成長はそこで止まってしまった。

帝京との対戦前夜、先生は帝京の監督にバカにされたと言つて悔しがっていた。そこにも選手より燃えていた先生の姿があった。帝京の先制点は私のミスからのものだった。その後は、せきを切ったように大量失点となつたが、途中で負傷し、ベンチに戻った私は、あれ程意気込んでいた先生に悪くて、顔を見るともできなかつた。結局、先生にとつても久しぶりの晴れ舞台は、惨めな結果となつた。

その後の新チームは、芳しい成績を残すことなく、先生は第一線を退くこととなつた。「いつの日か全国へ」そう言つて引かなかつた先生が湘南を去るのは寂しいことである。私達は、その一步手前で止まつてしまつたことを申し訳なく思い、しかし、そこまで育てて下さつたことを感謝し、いつまでも先生と同様に、湘南サッカーを見守つていきたい。

えていたのは先生自身だったような気がする。まして、相手が帝京と決まるとき、私達が戸惑う程の厳しさを表に出了した。しかし、私達は、時々見せる先生のやさしさに甘えてしまい、チームの成長はそこで止まってしまった。

帝京との対戦前夜、先生は帝京の監督にバカにされたと言つて悔しがっていた。そこにも選手より燃えていた先生の姿があった。帝京の先制点は私のミスからのものだった。その後は、せきを切ったように大量失点となつたが、途中で負傷し、ベンチに戻った私は、あれ程意気込んでいた先生に悪くて、顔を見るともできなかつた。結局、先生にとつても久しぶりの晴れ舞台は、惨めな結果となつた。

## 基本で国体優勝

### 六十一回生 水谷隆一郎

奈良で開催された第三十九回国民体育大会に私が出場したのは今から五年前、高校二年のときでした。神奈川選抜チームは一回戦突破を目標に大会に臨みながら勢いに乗り、信じられないような快進撃をみせ、決勝戦まで勝ち上がつてしまつたのです。決勝での相手は三年連続決勝進出のサッカー王国静岡選抜。試合は雨が降りしきる悪コンディションの中で行われましたが、開始早々の三分、静岡の守備陣の集中力が一瞬途切れたスキをついて、右サイドからのセンタリングに中央でうまく合わせて先制ゴールを奪いました。結局この立ち上がりの一点を神奈川が守り切り、昭和二十一年（なんとまあこの年の第一回大会は湘南中が優勝していたのでした）以来三十八年ぶりの覇権を獲得したのです。タイムアップの笛がなつた瞬間、全国優勝の喜びをかみしめているときにふと頭にうかんだのが鈴木先生（以下中さんとよばせていただきます）の顔だった、ということはなかつたのですが、中さんとの出会いなくしてはこの日の喜びはありません。

中さんとの出会いは私が中学二年のとき、村岡中学校が全国中学校大会に出場する際のことです。大会に向けて湘南の胸を借りての練習試合の後、私たちを激励して

# 1981-88

〈昭56～昭63〉

くれた中年ぶとりのおじさんが中さんでした。自分達の試合の内容を鋭く分析され、「これはタダ者ではない」という印象がその時、強く残ったのを覚えています。そして「サッカーをやるならこの人のもとでやりたい」と思つたかどうかはなにぶん八年ほど前のことなのでさだかではありませんが、その後、無事に湘南に入学することができ、中さんの指導をうけることになったのです。中さんのやさしく、そして時には厳しい、（そういえば私が一年の時の三年の某先輩は何度か中さんの『愛の蹴り』を頂戴していました）指導のもとで学んだのは基本の大切さです。あたり前のことですが、あたり前にできる、これは簡単そうで実は非常に難しいことなのです。そういうことができる選手を育てようとする情熱が中さんの指導の中にありました。サッカー選手として、自分のサッカーのスタイルを完成させる時期に中さんのようなすばらしい指導者にめぐりあえたのは幸運でした。

湘南サッカーといえば中さんのことと思いこんでいた私にとって湘南高校から中さんがいなくなってしまうことはとてもさみしいことです。しかし中さんのサッカー精神は、藤塚先生をはじめとして湘南のサッカー部の中にうけつがれていくことでしょう。

湘南の首領、中さん。<sup>ドン</sup>湘南の誇るべき先生だと思います。サッカーを通じてはもちろん、様々な場面で多くのことを中さんに学びました。こんな書き出しで始めるとまた、中先生に『おまえは相変わらず頭がかたいなあ』と言われそうです。これは3年間ずっと言われ続けたことで、卒業のころになつてやっと『少しさはやわらかくなつたな』と言われました。

中先生の体育はとても楽しかったです。2年、3年と中先生だったのですが、8割がたサッカーだったようないます。又、中先生だと生徒の方もかなり気合が入っていました、と言うか緊張感があつて結構レベルの高いものでした。中先生もたいてい試合に加わるのですが、僕のいるチームに入ったのはたった一回だけでした。でもその時がすごかったのです。中先生のアシストで僕は3得点だったので。別に自慢しているわけではないのですが、というのは、僕は非常に得点感覚の乏しいプレーヤーだからです。その僕があぶなげなく得点を決められるラストパス、本当にシューートしやすいやわらかいパスでした。先輩から数々の中さん伝説を聞いたり、中先生と接することができた僕たち湘南サッカー部員は、本当に幸せ者です。

## 湘南の首領

六十二回生 田中 敦

# 1981-88

〈昭56～昭63〉

今度、是非“中さんとお酒を飲もう会”でも開いて、皆と中さんを囲んでお酒を飲みたいのが本音です。

深いしわと笑顔

六十三回生 中沢正紀

鈴木中先生の県立荏田高校教頭就任を心からお慶び申し上げます。

鈴木中先生は愛称「チュウさん」と呼ばれ、若い我々に多大な影響を与えて下さいました。深いしわに刻まれた中先生のサッカーに対する情熱から、我々部員は深い感銘を覚え、サッカーの奥深さ、面白さ、厳しさを叩き込まれたのでした。

一方、静岡遠征でのカラオケ大会では、高校サッカーの主題歌「ふりむくな／君は美しい」をもみ手で歌うなどひょきんな一面も見せて下さいました。また、試合展開を予見するなどノストラダムスもびっくりするほどでした。

良き指導者を失うことは湘南サッカーにとって大きな痛手となるでしょうが、しかし、中さんが、二十数年間に渡って湘南サッカーに残した足跡は長く伝統として受け継がれることでしょう。

荏田高校での中先生の新たなるご活躍とご健康をお祈りいたします。



# 1981-88

〈昭56～昭63〉

## 理想に向つて

六十四回生　若木　均

昭和六十四年一月四日、盛岡商戦の試合終了後、控え室で見せた中先生の涙はどういったものだったでしょう。「精一杯やつたじゃないか」という言葉を聞いていて、僕も虚脱感の中にあってどこか感じるものがありました。県内制覇、全国大会出場というひとつ大きな目標を達成し、大会の三回戦。結果は〇一三と惨敗でありましたが、それは悔し涙だけではなかったと感じました。湘南高校サッカー部に籍を置いたOB・OGの皆さんならばあの感触はわかつて頂けるものと思います。などといきなり渋く書き出してしまいましたが、OB一年生になつたばかりの僕はまだ中先生とはたつた三年のおつきあいであります。これからはまだサッカー以外にもたくさん教わらないとなりません。

ところで、僕がサッカーを通じてこの三年のあいだに学んだことは数多くありますが、そのひとつに、「いつも理想や目的をもつて行動する」ということです。先生は練習中に「いつも今やっている練習がなんのための練習なのか意識しろ。」など注意してくださいました。言葉や表現は違いますが何度も聞いた記憶があります。僕たちには、県内制覇という目的がありました。また個々人にもそれぞれに、多くの目標があつたと思うし、今もある

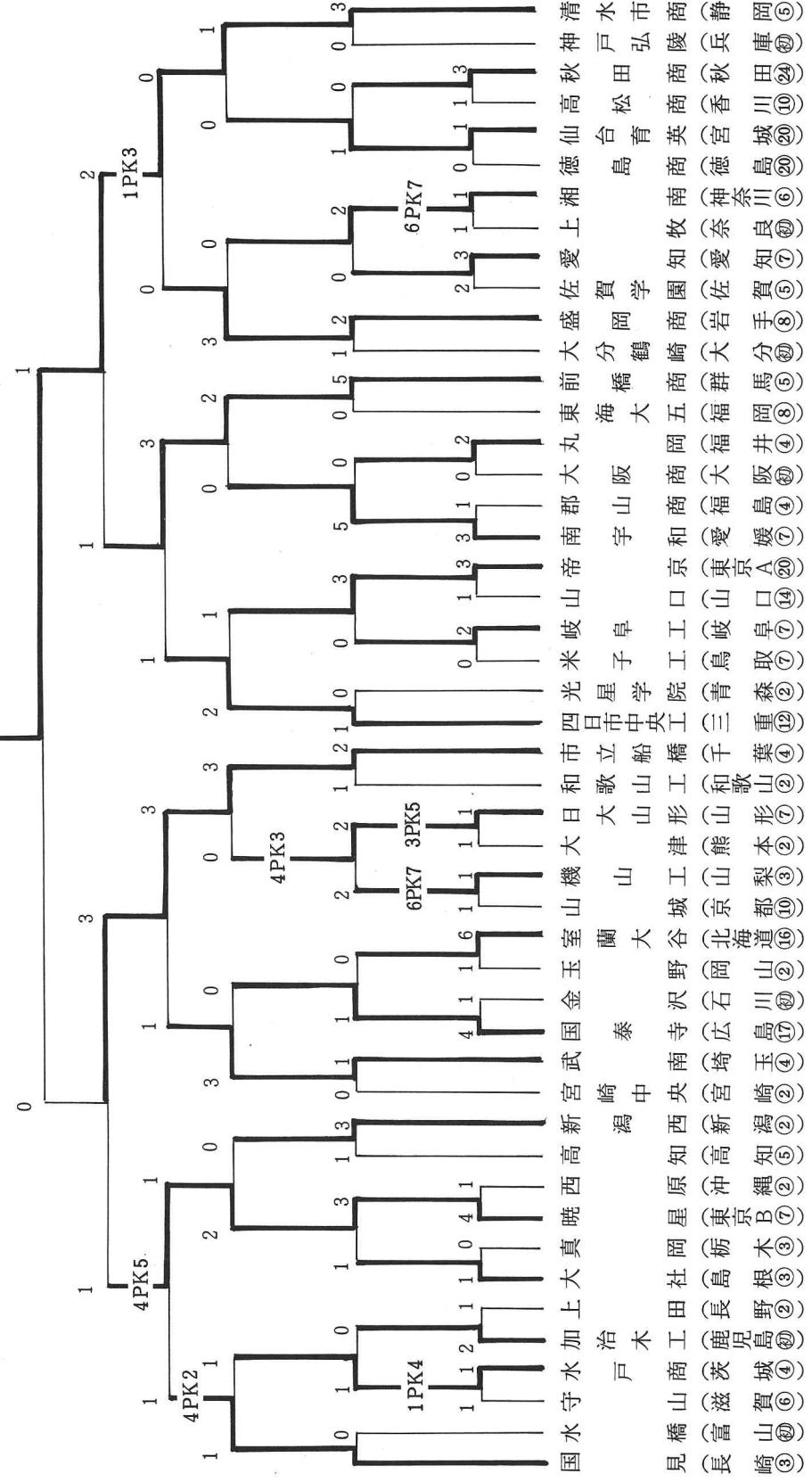
るでしょう。だから、僕たちはその目標を達成すべく、毎日を過ごしてきました。高校サッカーに関して言えば、うちの学校は選手を集めることは到底無理ですし、するつもりもないでしょう。それでもそういう学校にも勝つことはできるのです。それがすべてとはいわないけれど、いつも目標を高きにおいて、理想のために戦う、ということがいかに重要であるかは誰にもわかるでしょう。このことは、さまざまことに通じると確信しています。にもかかわらず、それは意識されていないことが数多くあると感じます。目標が意識されない行動からはいい結果は得られないでしょうし、またそこから得るものも薄いものでしょう。たとえ夢が実現されなくとも、夢を持つて行動するところから得るものが多いでしょう。そしてまた、目標は通過点にすぎないし、そこで止まることはないとも思います。止まつて振り返つて反省することも必要だと思います。「いつも理想のために戦う。」こんな気持ちでいたいものだと感じています。

少々大げさになつてしまつたし、「こんなことは言つてないぞ。」などと言われそうですが、大目に見てもらいたいと思います。そして、これからも中先生には、高校生などさまざまな人たちに多くのことを指導していくほししいと思いますし、先生自身もいつものように夢と理想を追いつづけてほしいと願っています。

# 第67回全国高校サッカー選手権大会

(昭和64年1月1日～平成元年1月10日)

優勝清水商



中贊百人一首

「厳格」「余裕」この二語で言い表わせる大監督。

アメとムチは使いよう。

私をサッカーキチガイにした張本人です。

青春＝湘南高校＝サッカー＝中さん。

蹴球にかけた情熱を少しでも学びとれたら。

夏が来れば想い出す、後頭部への痛烈な怒鳴声。

選手の“脚”を萎縮させる不思議な声の持ち主。

ゴール際の地蔵菩薩

助さん格さんから見た先生は黄門さまです。

我が青春、仁王様、バスアンドゴー&赤いパブリカ。

合宿で竹刀持つ手で子をなだめ。

三年間で二回褒められました。

五十七回生 増子卓爾

六十二回生 高橋裕史

五十四回生 森正俊

四十二回生 官坂一郎

五十四回生 石井弘之

四十九回生 白井隆

四十七回生 佐藤徹

六十五回生 野口悟志

四十五回生 山口晴夫

四十八回生 青木猛

五十回生 貴志直文

五十九回生 大久保将之

近所のおじさんが、偉大なサッカーの師に

現役時代と〇Ｂになつてからとで全く評価の変わる人。

高校サッカー界の知将。

「師」一生頭を上げることができない人。

恩師、中！青春ドラマを地で行く粹な男！

神と言つても過言ではない、蹴球的達人！

家庭を犠牲にしてサッカーに打ち込んだ男。

ほめない人、唯一度、休み方をほめられた。

階段の上からメガホンで中さんに怒鳴られた。

我思彼以貫録行道又大愛蹴球与女性。

あんな楽しく人生送つてる人見たことない

中さんは「あさすずめ」の好敵手である。

四十八回生 中嶋 修

四十八回生 細川周平

六十一回生 水上雅樹

四十四回生 桑本卓

四十六回生 上野義弘

六十四回生 小林卓麻

四十五回生 浅倉泰

四十八回生 関佳史

五十回生 土屋正憲

六十四回生 若木均

五十九回生 江越宏明

五十六回生 渡邊光晴

「これが青春だ！」の主人公そのものでした。

親分肌。存在感。勇気。

顔はこわいが、背中は優しかった方です。

長老。

厳しさを教えてくれた鬼先生。

表情変えずに決断する男の美学を体現した人。

中さんのニヤツとした笑顔はとても印象的。

今もなお夢に出て我をはげますサッカー狂い。

よく、テニス部の女子と談笑なさってました。

雲の上の存在。話す時はいつも緊張しました。

湘南サッカーのクラマーさん。

サッカーがとてもうまかった。

四十九回生 元松経男

五十九回生 美野真司

五十一回生 大木孝

六十二回生 田中敦

五十二回生 重松正久

五十三回生 新倉博史

五十五回生 大川和美

四十八回生 吉田弘

五十七回生 中川靖志

六十四回生 善木茂雄

五十回生 河合稔

四十九回生 菅浦義治

白髪の名（迷）ウイニング！

五十三回生

武藤俊一

私に男の厳しさと優しさを教えてくれた人。

四十八回生

瀬戸康弘

サッカーに捧げ続けた日曜日。

五十七回生

一星光利

どうもこうも食えない御方。

五十六回生

水戸将史

サッカー音頭を地で行く人。

五十二回生

永富良一

女子生徒の前で急に鋭いプレーとなる蹴球人。

五十七回生

河野光治

神奈川県高校サッカー界のドン——かな？

四十九回生

奥井誠人

わがサッカー人生における親父かな。

五十三回生

岩田淳一

湘南の名監督。きびしさの中にやさしさあり。

四十八回生

川口秀実

湘南の父。

六十四回生

木村義幸

かわいい先生。

六十三回生

松延頼子

神様。

六十三回生

羽田伸一

素晴らしい青春をくれた人。

コーナーキープだけは一生忘れません。

サッカーを此上無く愛す男。

厳しさ・優しさ・情熱・忍耐の人間蹴球先生。

湘南の思い出は中さんとサッカーがすべてだ。

青春を卒業して、なお青春のただ中に居る!!

いつまでもサッカーを青春し続ける幸福者。

中さんは中さん。

叱咤激励はそれはそれは凄いものでした。

近代サッカーを持ち込んだ男湘南のクラマー。

中さんに会うたびに、中三の頃を思い出す。

退学せずに済んだ命の恩人（バイク事件）。

四十二回生 広野三夫

六十一回生 前田浩

五十八回生 渕野信一

四十二回生 関口真

四十二回生 中川哲夫

五十九回生 上田禎

五十九回生 富田直幸

五十八回生 柴田知樹

四十六回生 岸本喜久雄

四十五回生 中里哲郎

六十四回生 苑田浩之

四十五回生 佐藤良

人生四十年父母の他に恩人はこの人だけ。

我が湘南サッカー部は永遠に仏めつ不滅です。

地獄で鬼とボールを蹴る。

見かけは赤銅、中味はいぶし銀……かな？

湘南サッカー中興の祖。我人生の背骨。感謝。

サッカーの“生き字引”

湘南サッカーの親分（ドン）。

技に対し頭で戦うサッカーの指揮官。

頭の中、サッカーサッカーサッカーですよね？

ボール蹴る喜び知ったあの教え。

頑固一徹。

玉ではなく石コロを一生懸命磨かれた方です。

四十一回生 渡辺象次

五十八回生 馬場克拓

四十六回生 松元隆平

五十三回生 本島玲子

三十九回生 鈴木俊邦

六十四回生 及川憲之

五十九回生 大沼寧

四十二回生 田部井徹

五十九回生 石川啓一

四十五回生 福井民雄

五十一回生 清原信男

五十回生

川口正人

詠嘆　しょせん石を磨いても光らんなんあ。

中さん＝サッカー＝湘南＝サッカー＝中さん。

中さんは僕にとってサッカーそのもの。

日焼けした顔が印象的な大親分。

厳しさと優しさのけじめがしつかりしている人。

おかげさまで今でもサッカーをやめられません。

ヘビーな監督。

あの美人の奥さんに会いたくてよく長後へ。

グランドでの姿はまさに鬼そのものでした。

厳しいけど温情ある監督でした。

一〇〇%サッカー漬けの湘南高校の名物。

とにかく女生徒には甘い。

五十回生　高井　雄一郎

四十三回生　福西　紀夫

六十回生　平子　勝介

六十回生　永原　央

六十回生　安田　百合

五十一回生　向井　猛

六十回生　武井　基紀

四十回生　君島　正彦

三十九回生　山宮　通弘

五十一回生　石郷岡　善則

四十三回生　猿渡　光洋

六十四回生　羽尻　慎

美しい奥様をいつまでも大切に。

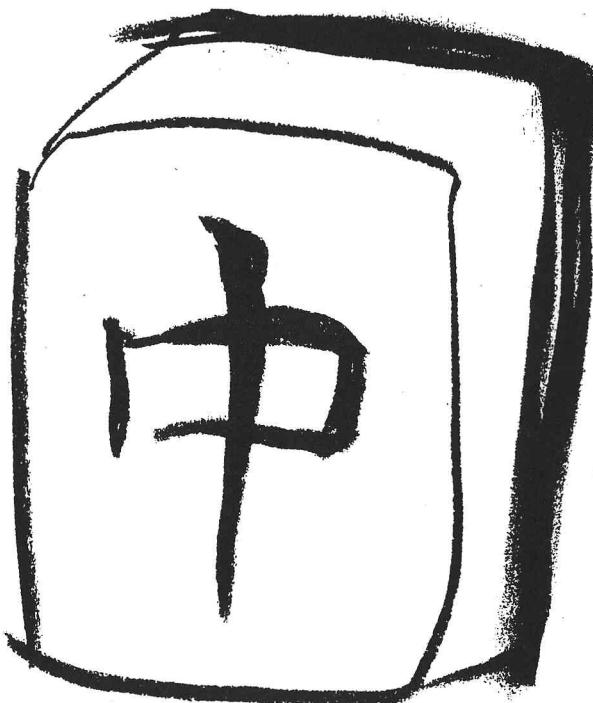
湘南着任一時間後に部員を激励した中さん。

湘南高校の校長めざしてがんばれ。

日本のサッカー界の為にもう一働きを期待。

湘南サッカー。

休みたかった練習、でもやっぱり楽しかった。



四十回生 矢沢光広

三十九回生

岡本行夫

六十四回生

平田隆大

四十回生

奥村竜昭

六十四回生

永井潤一

四十七回生

田中靖

# 1989~

〈平成元年～〉

## OB会、そして現役

現監督 五十四回生 藤塚 久雄

「湘南サッカー」を、全国に示してから、はや、半年が過ぎました。現在、その大会の県一次予選が、終了し、県内一百九校中のベスト十六に入っています。今年も、三年生が、五名残つており、十月に始まる県二次予選に向け、練習に励んでいます。正月の大会終了から間もなく、新人戦の中央大会を戦い、ベスト十六まで進出しました。これは、三年生七名を中心とした、全国大会向けのチームワークから、二年生一年生でのチームへの切り換えが、まずまず出来たということでした。その後、関東大会県予選を、ベスト十六、インターハイ県予選を、ベスト八まで戦うことが出来たことを考えると、現在の大会も期待が持てそうです。

私が、新採用教員として、湘南に赴任したのは、昭和五十九年四月でした。母校で後輩を指導出来る喜びは、同時に、重い責任感を私に与えました。さらに、私に、時間（任期）の制約が加わりました。それは、県教委の打ち出した、「新採用教員は、十年で転勤しなければならない」というルールです。十年のあいだに、自分なりに、母校に恩返しをしなければならないことになつたのです。幸いに、私と、私のチームは五年目に、ひとつのみ目標を達成することが出来、私の責任を少し軽くしていく

れました。残る任期は、あと五年となりましたが、日々を、新しい勉強の連続と考え、部員とともに「日本一」を目指に、創意・工夫を目指したいと思っています。話は、変りますが、私は、全国大会出場が決まるまで、OB会事務局の仕事をもしていました。事務局としての仕事で、皆様に、いろいろと失礼なことをしたのではないかと思いますので、ここで一言お詫び申し上げます。

私が、OB会事務局の仕事を引き受けたのには、二つの理由があります。ひとつは、OBとして、現役時代に受けたOB会というものに、恩を返すという単純なものですが。もうひとつは、大学時代に、ゼミの教授が、「夢」を持つことはお金がなくても出来る。しかし、夢を実現させるためには、経済力が必要なのだ」と話されたことが、私の心中に残っていたからです。OB会を活性化させれば、自然と現役への寄附が増え、その夢をかなえるための経済的な下地が出来ると思ったのです。

春のさくらメール、夏の活動計画案内、住所録の作成など、OBとのコンタクトをとることに重点を置くとともに、郵便振替口座をもうけ、OB会費を振り込みやすくなりました。昭和六十二年には、OB会に寄せられる会費は約2倍となりました。

このようにして、OB会に寄せられた会費から、現役に経済援助が出来ることには、単に金銭的な基盤が出来ること以外にも、大きな意味があると考えています。ビデオ機器を使っての戦術などに対するイメージトレーニングが可能になつたこと。ボールについては、一人一個しかも試合に用いることのできるボールを使っての練習

# 1989~

〈平成元年～〉



が可能になつたことなどは、単に金銭的なものです。なによりも効果があることは、部員ひとりが、「我々は、OBから愛されている、バックアップされているのだ」と感ずることが出来るという、精神的な安定感が得られるということではなかろうかと思う。良い意味での、他校生徒との差別意識を認識しながらサッカーをすることが出来た……つまり、何というか、湘南のスタイルを、より増幅することが出来ることに、単に金銭的でない、OBからの寄附の効果であると考えています。

現役の活躍によつてOB会が盛んになり、OB会のバックアップが現役の良い結果の支えとなる。こんな良い関係が、今後とも続くよう希望します。



四十八回生 関 佳 史

中さんの赴任した荏田高校は、田園都市線荏田駅から十数分、新興住宅地の中にある。創立十一年目。スポーツ、部活動が盛ん。陸上中長距離のアイドル、日産の田村はOG。毎朝七時半に出勤。万歩計をつけて校内を歩く。高校では管理職は校長、教頭の二人だけ。当然、ハンコを押す書類は多く、ボールを蹴る機会は減った。サッカー協会の副理事長ほかの役職も多い。中間管理職が最もストレスがたまるという。頑張って下さい。

四十五回生 山 口 晴 夫

岩淵先生の「偲ぶ会」から「全国大会出場壮行会」に至るまで、新生OB会事務局の安保・相羽両氏宅を中心とした活動も、はや10年をむかえようとしている。

若手OBと言われた我々も、この「記録集」の作製に関わり、一時代の過ぎ去つていったことを感じた。

平成と年号も改まったここに、60余年にわたる歴史を

顧みることの意味は大きい。

ここに、あらためて先輩諸兄には変わらぬご援助をお願いすると同時に、数的には大部分を占める学生を中心

とした本来の若手OBの諸君に、会運営・集まりへの積極的参加を望んでやまない。

四十一回生 植 松 二 郎

八年前、岩淵二郎先生への追悼の意をこめた「湘南サッカー半世紀を経て」という本がまとめられた。事実上はじめてのOB会記念誌だった。今回はその意味でOB

会誌第一号ということになる。ごらんいただくように、鈴木中先生への感謝が特集である。実戦譜と掲げるからにはもっともっとふんだんの記録、写真があつてしかるべきと思う。前回のものを補ったとはいえ、まだまだ不十分。言うまでもないことだが、湘南サッカー史はこの程度でおさまるくらいの質量ではない。たとえば創部七十年か八十年かの記念で、がっかりした完全保存版を。当該が、そのためのステップとなれば幸いと思う。

四十一回生 相 羽 克 治

記念誌発行にあたり、原稿・資料等ご協力を戴きありがとうございました。サッカーに打ち込んだ高校（旧制中学）の時が、仲間や恩師と共に、各位それぞれの心に深く、熱く残っていることをひしひしと感じました。

現役は頑張っています。この記念誌発行の端緒、とうより、OBにまとまる機会を与えてくれたのは、23年振りの全国選手権大会出場という現役の活躍でした。

OB会としても、年一回の会報発行と年二回の集まりは続けてまいりますが、いつの日か、OB各位の深く、熱い思いをのせて「湘南サッカー」の集大成が出来ればと夢見ております。

湘南サッカー実戦譜

——特集 鈴木中先生の二十八年間 ——

発行 湘南サッカーOB会 印刷 中央印刷(有)

「湘南サツカ一 半世紀を経て」追録版